

相可出張遺跡（第2次）発掘調査報告

2012（平成24）年3月

三重県埋蔵文化財センター



SD 101 石組遺構検出前（北東から）



SD 101 石組遺構検出前（北から）

S
D
101
[2]



SD 101 石組遺構（北東から）



SD 101 石組遺構検出時（北から）



石組遺構 石積・石敷（東から）



石組遺構 石敷湧水点（東から）



中世墓（SK 107）（南から）



中世墓出土遺物（SK 107、SK 112、SK 115）

例　　言

1. 本書は、三重県多気郡多気町相可に所在する相可出張遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の調査は、平成22年度県立相可高等学校校舎その他建築事業に伴って実施した。
3. 調査の体制等は次の通りである。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
調査研究Ⅰ課	主査　奥田　勝久
	技師　相場　さやか
調査期間	工事立会（B区） 平成22年4月21日～4月23日
本調査	（A区） 平成22年4月30日～9月10日
工事立会	（C区） 平成22年12月21日～平成23年1月27日
調査面積	1,288m ²
4. 調査にあたっては、相可高等学校をはじめ、松阪市教育委員会、株式会社井戸坂建設、株式会社北村組の協力を得た。
5. 当報告書の作成業務は調査研究Ⅰ課が行った。執筆は調査担当者および当課職員が行い、目次と文末に明示した。また、第V章の自然科学分析については、委託先の株式会社パリノ・サーヴェイから提出されたものを掲載した。石組遺構及び遺物の撮影は田中生久が行った。本書の編集は相場が行った。
6. 現地調査および報告書作成にあたって以下の方々から有益なご教示を頂いた。（敬称略・五十音順）
今江秀史（京都市文化財保護課）、ト部行弘（橿原考古学研究所）、榎村寛之（斎宮歴史博物館）、小野健吉（奈良文化財研究所）、鈴木久男（京都産業大学）、仲 隆裕（京都造形芸術大学）、宮崎雅充（高島市教育委員会）、和田 萃（京都教育大学）
7. 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用頂きたい。

凡　　例

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図「大河内」「松阪」「横野」「国東山」、多気町発行の1:2,500都市計画平面図、相可高校校舎配置図等を基にしている。
2. 調査区の座標は、測地成果2000に対応した新座標第VI系で標記している。本書での方位は座標北を使用している。
3. 土層及び遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行 1967年初版、2003年第23版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
4. 本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。

SD ; 構	SK ; 土坑	中世墓	SB ; 掘立柱建物	SE ; 井戸	Pit ; 柱穴	小穴
--------	---------	-----	------------	---------	----------	----
5. 掘図と写真的図版番号は、遺物実測図の番号と対応している。なお、遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

目 次

I	前言	(相場・森川)	1
1	調査の契機		
2	調査の経過と法的措置		
3	発掘調査と整理作業の方法		
4	石組遺構の保護協議		
II	位置と環境	(相場)	5
1	地理的環境		
2	歴史的環境		
III	遺構	(相場)	9
1	基本層位		
2	概要		
3	大溝S D101		
4	古墳時代の遺構		
5	古代の遺構		
6	中世の遺構		
7	平成8年度立会調査区の遺構		
IV	遺物	(相場)	27
1	弥生時代の遺物		
2	古墳時代の遺物		
3	大溝S D101の遺物		
4	古代の遺物		
5	中世の遺物		
V	自然科学分析	(相場・バリノ・サーヴェイ株式会社)	41
VI	結語	(相場)	43
1	相可出張遺跡の変遷		
2	石組遺構の考古学的位置付け		
3	石組遺構の性格		
4	総括		

挿図目次

- 第1図 相可高校新実習棟基礎施設配置図
第2図 遺跡位置図
第3図 相可地区採集遺物
第4図 調査区周辺地形図
第5図 調査区位置図
第6図 A区土層断面図（東壁・西壁）
第7図 A区土層断面図（北壁）
第8図 C区遺構平面図
第9図 A区・B区遺構平面図
第10図 S D101石組遺構の各部名称
第11図 S D101土層断面図（南壁）
第12図 S D101流路の推定
第13図 石組遺構平面図
第14図 石積 平面図・立面図
第15図 石敷上段 平面図・断面図
第16図 石敷下段 平面図・断面図
第17図 西岸テラス 平面図・立面図
第18図 東岸テラス 平面図・立面図
第19図 石組遺構 断面図・断面見通し図
第20図 中世墓出土状況図
第21図 包含層出土遺物実測図
第22図 S K125出土遺物実測図
第23図 S D101最下層出土遺物実測図
第24図 S D101下層出土遺物実測図
第25図 S D101上層・SD1・SK113・SK126・A区H6Pit4出土遺物実測図
第26図 S D102・SD103・SK107・SK112・SK115・SK104・SK111出土遺物実測図
第27図 SK110・SK114・SK121・SK122・SK116・SK117・SK127・B区Pit1・包含層 出土遺物実測図

表目次

- 第1表 遺構一覧表
第2表 遺物観察表（1）
第3表 遺物観察表（2）
第4表 遺物観察表（3）
第5表 遺物観察表（4）
第6表 遺物観察表（5）
第7表 遺物観察表（6）
第8表 花粉分析結果

写真目次

- 写真1 第2回現地説明会風景
写真2 石組遺構の保存状況
写真3 石敷上段
写真4 石敷下段
写真5 石積断面

写真図版目次

- 卷頭図版1 SD101（1）
卷頭図版2 SD101（2）
卷頭図版3 SD101（3）
卷頭図版4 中世墓
表 紙 遺跡周辺の航空写真
写真図版1 調査前風景・A区全景（東側）・SD
写真図版2 A区全景（西側）・SD101土層断面
写真図版3 SD101石組遺構（1）
写真図版4 SD101石組遺構（2）
写真図版5 SD101石組遺構（3）・SK107
写真図版6 中世墓出土状況
写真図版7 出土遺物（1）
写真図版8 出土遺物（2）
写真図版9 出土遺物（3）
写真図版10 出土遺物（4）
写真図版11 出土遺物（5）
写真図版12 自然科学分析

I 前 言

1 調査の契機

(1) 総説

三重県立相可高等学校は昭和 23 年に創立された、地域に根ざした高校である。その前身は明治 40 年設立の相可村外三ヶ村組合立農業学校と附設組合立実業女学校で、その後大正 11 年に多気実業学校と名を変えているが、約 100 年の間、伊勢本街道に面して学舎を構えている。近年では食物調理科が全国的に有名になり、平成 21 年度、調理実習などを行う新実習棟の建築が計画された。

発掘調査は平成 22 年度新校舎建築事業に伴い実施した。調理実習棟建築予定地（A 区）は本調査を実施し、配管配線等に伴う工事は立会調査（B 区・C 区）を行った。最終調査面積は計 1,288 m² である。

(2) 範囲確認調査と協議

平成 7 年度の第 1 次調査は、調理実習棟建築予定地の南側に位置する武道場建築時に実施され、古代の大溝が検出された。平成 8 年 11 月には第 1 次調査区南側のクラブハウス建築に伴う立会調査が行われ、大溝が武道場の南側に続くことを確認している。

平成 22 年 3 月、新校舎の建築に向け範囲確認調査を実施した。範囲確認調査は、三重県埋蔵文化財センター（以下センター）調査研究 I 課田中久生が担当し、合計 3 カ所の調査坑から柱穴や溝を検出し、土器類などの遺物を確認した。これを受けて当センターは、新校舎の工事施工にあたって保護措置が必要であると回答した。教育委員会事務局学校施設室と保護措置について協議を重ねたが、現状保存が困難なことにより、新校舎建築箇所全城を本調査、その他配管配線等に伴う工事を工事立会調査で実施し、記録保存することになった。

調理実習は根幹となる授業であるため、平成 23 年当初の新実習棟での授業開始に向けて、平成 22 年度中の建築工程に埋蔵文化財の調査期間を組み込むことになり、全体的に余裕のない工程となつた。このため、当センターでは年度早々に調査を開始し、8 月に終了する工程で調査を進めた。

2 調査の経過と法的措置

(1) 発掘調査の経過

本調査は、発掘調査業務（土工管理）を株式会社アートに委託した。工事立会調査は、相可高校及び県学校施設室からの労務提供を受けて実施した。石組造構の埋め戻し作業は株式会社井戸坂建設が、石組造構の 3D 計測は株式会社イビソクが受託した。

なお調査にあたっては相可高校からご理解とご協力を頂いた。ここより感謝申し上げたい。

【調査日誌（抄）】

- 3 月 8 日 範囲確認調査の実施。
4 月 19 日 現地協議（相可高校）。
4 月 21 日 B 区（武道場南側排水溝）の機械掘削、検出、人力掘削。
4 月 23 日 B 区平面図測量、写真撮影。
4 月 30 日 A 区調査の事前協議（センター）。
5 月 6 日 A 区調査前風景写真撮影、基準点測量。
5 月 7 日 現地協議（相可高校）、基準点測量。
5 月 13 日 調査前の段階確認実施。
5 月 14 日～6 月 2 日 機械掘削
5 月 14 日 SD 101 検出。
5 月 17 日 SD 102 検出。
5 月 20 日 SD 103 検出。
5 月 21 日 基準杭の G P S 測量。
5 月 25 日 前日の雨天で SD 101 北壁崩落。機械で除去。旧校舎基礎の擾乱を除去。
5 月 27 日 SK 107 付近検出。
5 月 28 日 機械掘削の段階確認、地区杭設定。
5 月 29 日～7 月 8 日 遺構掘削。
6 月 3 日 SD 101 人力掘削開始。
6 月 8 日 機械掘削の段階確認、地区杭設定。
SD 101 西岸より石積の一部を検出。
6 月 10 日 SD 101, SD 102, SD 103 掘削。
6 月 11 日 SD 101 土層観察用ベルトの除去。
6 月 17 日 SK 107 掘削、中世墓と確認。
6 月 21 日 SK 112, SK 115 中世墓と確認。
6 月 25 日 調査区全景写真撮影。

- 6月 28 日ー 29 日 平面図・断面図実測。
- 6月 30 日 第1回現地説明会の資料提供。
- 7月 3 日 第1回現地説明会、雨天中止。
- 7月 5 日 石組遺構のうち、石積が検出。
相可高校生徒見学会。
- 7月 6 日 石積の下から石敷を検出し、石敷直上
から須恵器壺身出土。続いて石貼も検出。
河北秀実所長、石組遺構現地確認。
- 7月 8 日 石組遺構写真撮影。
- 7月 9 日 社会教育・文化財保護室職員現地視察。
- 7月 12 日ー 16 日 石組遺構掘削。
平面図・断面図実測、写真撮影。
- 7月 20 日 小野健吉氏（奈良文化財研究所）、卜部行弘氏（樋原考古学研究所）に情報提供。
- 7月 27 日 SD 101 断面図実測。
- 8月 2 日 小野健吉氏現地指導。
- 8月 3 日 八賀晋氏現地視察。
- 8月 6 日 石組遺構保存協議開始。
- 8月 6 日 榎村寛之氏（斎宮歴史博物館）、遠藤慶太氏（皇學館大学神道研究所）、佐野真人口氏（同大学）現地視察。
- 8月 10 日 今江秀史氏（京都市）現地視察。
- 8月 18 日 和田革氏（京都教育大学）現地指導。
- 8月 20 日 西岸テラスの北端石貼検出。
- 8月 21 日 石敷の湧水点検出。鈴木久男氏（京都産業大学）、宮崎雅充氏（高島市）視察。
- 8月 22 日 古代史サマーセミナー関係者來訪。
- 8月 24 日 松阪市政記者クラブに報道提供。
- 8月 26 日 武道場の下に続く石敷検出、実測。
- 8月 29 日 石組遺構現地公開（第2回現地説明会）。
- 8月 30 日 全景写真、レベル入れ。
- 9月 1 日 石組遺構 3D 測量。卜部行弘氏現地視察。
- 9月 3 日 仲隆裕氏（京都造形芸術大学）現地視察。
- 9月 6 日 石組の断面図追加、石貼の下端を確認。
- 9月 7 日 石貼の洲浜状範囲を確認。
- 9月 10 日 石組遺構埋め戻し作業。
- 12月 21 日 C区工事立会調査、東南端より開始。
- 12月 24 日 SD 121 付近掘削、図面、写真撮影。
- 12月 27 日 座標振込。電気配線箇所も立会調査。
- 12月 28 日 SK 125 付近掘削、図面、写真撮影。
- 1月 6 日 電気配線箇所工事立会（旧校舎撤去）。
- 1月 7 日 SK 127 付近掘削。
- 1月 13 日 電気配線箇所工事立会（旧校舎撤去）。
- 1月 27 日 C地区、武道場南側工事立会。
- (2) 発掘調査の普及・公開
- ・三重県埋蔵文化財センターHPにおいて、発掘調査情報を提供した。
 - ・遺構の掘削状況により、現地説明会を2度計画した。第1回現地説明会は、6月30日に報道提供を行い、7月3日に実施予定であったが、雨天中止となった。第2回現地説明会は、石組遺構が検出されたのち8月24日に報道提供を行い、8月29日に実施された。参加者は約100名であった。
 - ・8月22日に古代史学会サマーセミナー伊勢大会現地見学会が行われ、約90名の古代史関係者が見学。
 - ・6月16日に相可高校新聞部の取材を受け、「相可高新聞『かわら版』」に掲載された。
 - ・7月6日、相可高校の日本史選択者24名を対象とした現地見学会を実施した。
 - ・GPS測量で校内に基準杭を2点設置し、相可高校環境創造科にデータを提供した。
 - ・県松阪序舎で、発掘調査の速報展示を2回開催、大溝や中世墓出土資料の展示を行った。



写真1 第2回現地説明会風景

(3) 文化財保護法等に関する諸手続

- 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第1項
平成22年3月31日付 教委第19-84号
三重県教育委員会長から三重県教育委員会教育長
あて「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事
等の通知書」
- 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第2項

- 平成 22 年 4 月 1 日付 教委第 12-4001 号
三重県教育委員会教育長から三重県教育委員会教育長あて「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」
- 文化財保護法 99 条第 1 項
- 平成 22 年 7 月 12 日付 教理第 87 号
三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて
「埋蔵文化財文化財発掘調査の報告について」
- 文化財保護法第 100 条第 2 項
- 平成 23 年 3 月 31 日付 教委第 12-4425 号
三重県教育委員会教育長から松阪警察署長あて
「埋蔵文化財の発見・認定について（通知）」

3 発掘調査と整理作業の方法

（1） 挖削の方法

第 1 次発掘調査及び範囲確認調査を参考に、表土全体を重機掘削した。学校敷地内東側には、昭和 20 ~ 30 年代まで寄宿舎及び体育館が建っており、それらの基礎が遺構面に達している。そのため、大規模な擾乱部分については重機によって除去していった。造成土も厚いことから、機械掘削で出た残土は、高校から約 12km 離れた空き地に運搬した。

（2） 地区設定

調理実習棟建築予定地 1,123 m² は本調査を実施し、A 区とした。武道場の周りを巡る雨配水溝工事立会調査区約 42 m² は B 区、新校舎電気配線等工事立会調査区約 123 m² は C 区と設定した（第 5 図）。

調査区周辺に基準点がなかったため、G P S 測量で校内に基準杭を 2 点設置した。A 区は国土座標 X=165,750, Y=49,220 地点を基準点に、国土座標に沿って地区割りを行った。調査区内のグリッドは 4 m 四方で、西→東方向に数字を、北→南方向にアルファベットを付与した。B 区・C 区については工事立会調査のためグリッド設定は行わなかった。

なお第 1 次調査区及び平成 8 年度工事立会調査区の平面図については、調査成果に座標値が付与されていないため、調査区平面図（第 9 図）に配置する際は、現在の校舎配置図を元に平成 22 年度調査区との整合性を考慮した。

（3） 遺構番号

平成 7 年度に行われた相可出張遺跡第 1 次調査では、SD 1 から SA 12 まで、12 基の遺構が報告されている。平成 8 年度に行われた工事立会調査では、SD 1 から SK 4 の遺構番号が用いられている。

平成 22 年度の第 2 次調査では、調査実施時に SD 1 から SK 17 までを使用し、工事立会調査時に SK 18 から SK 29 までを用いた。今回の報告では、第 1 次調査と第 2 次調査の混乱を避けるため、平成 22 年度に実施した遺構については新たに 100 を足し、遺構番号を SK 101 から SK 129 として報告した。

ただし、第 1 次及び第 2 次調査出土遺物には、発掘調査時の遺構番号が注記されている。詳細は遺構一覧を参照されたい（第 1 表）。

（4） 遺構図面

本調査では、遺構検出段階でグリッド単位の 1/40 略測図（遺構カード）を作成した。

本調査・工事立会とともに、調査終了後 1/20 平面図を書き実測した。石組遺構・中世墓は個別に 1/10 平面図・立面図等を書き実測した。

石組遺構に関しては、三次元測量を実施した。

（5） 遺構写真

遺構は、調査区全景写真を 4 × 5 版、6 × 7 版で撮影し、調査の進捗状況などを中心とした細かな記録には 35mm 版を撮影した。石組遺構は 4 × 5 版で撮影した。フィルムは白黒とスライドを同時に作成し、デジタル画像も適宜撮影した。

（6） 遺物類の整理

出土遺物は、担当者が報告書掲載遺物およびその参考資料（A 遺物）と未掲載遺物（B 遺物）に区分した。石組遺構出土遺物は、未掲載分についても参考資料として A 遺物とともに保管している。（相場）

4 石組遺構の保存

石組遺構は調査が最終段階となった 7 月になって検出された。当センターは、県教育委員会社会教育・文化財保護室と情報共有を図りながら、学識経験者による現地指導を経て、古墳時代以来の伝統的手法で構築された飛鳥時代の石組遺構としては全国的に類例がなく極めて重要な遺構であることを確認した。

これを受けて、石組遺構の取扱についての協議が、工程に余裕がないために性急な判断が求められるな

かで行われることとなった。平成 22 年 8 月 6 日から、県教育委員会の学校施設室、高校教育室、教育改革室、社会教育・文化財保護室、埋蔵文化財センターの関係 5 機関で協議を開始した。

建築場所の変更や移動は、学校全体の大規模な施設配置変更を行わない限り無理な状況であるが、遺構を破壊しての建築を安易に選択すべきでないという認識では一致した。そこで、設計変更による遺構の保存とそれに伴う教育活動に与える影響についての協議に絞られた。

石組遺構に限れば、大溝 SD 101 の底に施されたもので、現地表から 3 m 以上の深部にある。このため建物の基礎部分の内、縦横に延びる地中梁による破壊からは免れる位置にあり、柱位置及びそれに付属する土壌の柱状改良が問題となった。柱位置の変更是構造計算や建築確認申請等に多くの期間が必要で、教育活動への大きな影響が必至である。そこで、土壌の柱状改良位置の変更を検討するなかで、実際の設計や施工監理を担当する県土整備部営繕室から第 1 図に示すような変更案が示された。これによれば、工程の遅れや石組施設への影響を最小限に止めることか可能となり、この手法を採択することで一致した。それでも新実習棟は一学期間の利用が出来なくなるが、これについては高校教育関係機関で調整することになった。ただし、石組遺構への多少の影響は避けられないため、それを担保する目的で三

次元測量による記録を加え、図上での復元を精緻に可能なものとし記録にも万全を期すこととした。その後、大溝 SD 101 上端まで充填する砂により石組遺構を包み保存することとした。

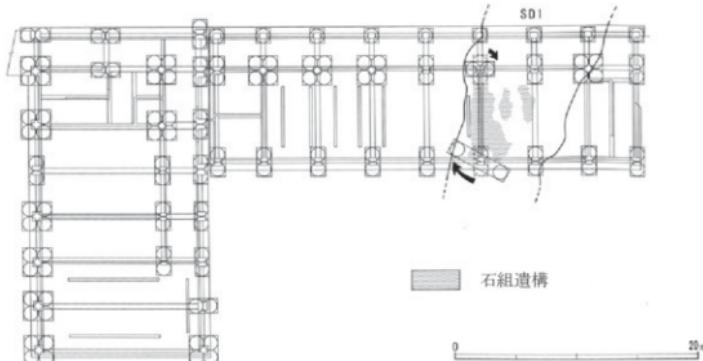
以上の事前協議を経て、平成 22 年 8 月 11 日付教導第 125 号にて埋蔵文化財センター所長から学校施設室長へ石組遺構の取り扱いについての依頼を行い、今後は前述の方針に従って進めることになった。

以上により、十分な措置には至らなかったが石組遺構の主要部分は保存されることになった。将来、近隣の状況が明らかになれば、その成果によっては史跡候補に成り得るものと判断するところである。

(調査研究 I 課長 森川常厚)



写真2 石組遺構の保存状況(北東から)



第1図 相可高校新実習棟基礎施設配置図 (1:400)

II 位置と環境

1 地理的環境

相可出張遺跡（1）は、三重県多気郡多気町大字相可に所在する。

三重県と奈良県の県境にある高見山（1,248m）に流れを発する櫛田川は、中央構造線に沿って三重県のほぼ中央を流れる。下流域では河川の両側に沖積平野が展開するが、中流域では櫛田川の下方浸食によって形成された2~3段の河岸段丘がみられる。相可出張遺跡のある多気郡多気町大字相可・三疋田・四疋田の集落は、櫛田川中流域南岸の河岸段丘上に位置する。

櫛田川南岸には、条里型地割りの残る水田の南側に標高200m~300mの丘陵があり、西杉根池や天引池などから北に向かって小川が流れ、櫛田川に合流する。相可出張遺跡から南東に約3km下ると、丘陵の南側から流れてきた佐奈川との合流地点となる。佐奈川合流地点より下流域は、平安時代の大洪水により郡界が変動する沖積地となる。

2 歴史的環境

（1）相可出張遺跡と相可高校校庭遺跡

平成7年度に行われた相可出張遺跡第1次調査では、古代の大溝、掘立柱建物のほか、中世の土坑、円形石組構築などが確認された。遺物は土器師高坏、甕、山茶碗、灰釉陶器、鉄製小刀などである。

相可高校敷地内にある校庭遺跡（2）では、昭和37年頃のグラウンド整備に伴う工事時に、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が出土している。一部は郷土資料館に残されており、器種は広口壺、ワイングラス形高坏、甕、台付甕などである。

（2）周辺の遺跡

近隣の遺跡状況については、周辺で実施された遺跡の発掘調査報告書で触れられているため、ここでは相可出張遺跡に関わりのある弥生時代以降に焦点を絞って記述することとする。

弥生時代 前期では、鐘突遺跡（3）で円形の竪穴住居が、鴻ノ木遺跡（4）で方形周溝墓が検出される。

中期前葉では、櫛田川のやや上流域に位置する花ノ木遺跡（5）で竪穴住居と方形周溝墓を検出している。なお多気郡四疋田の丘陵（6）には、昭和19年（1944）に銅鐸が出土したという伝承地があるが、実態は不明である。

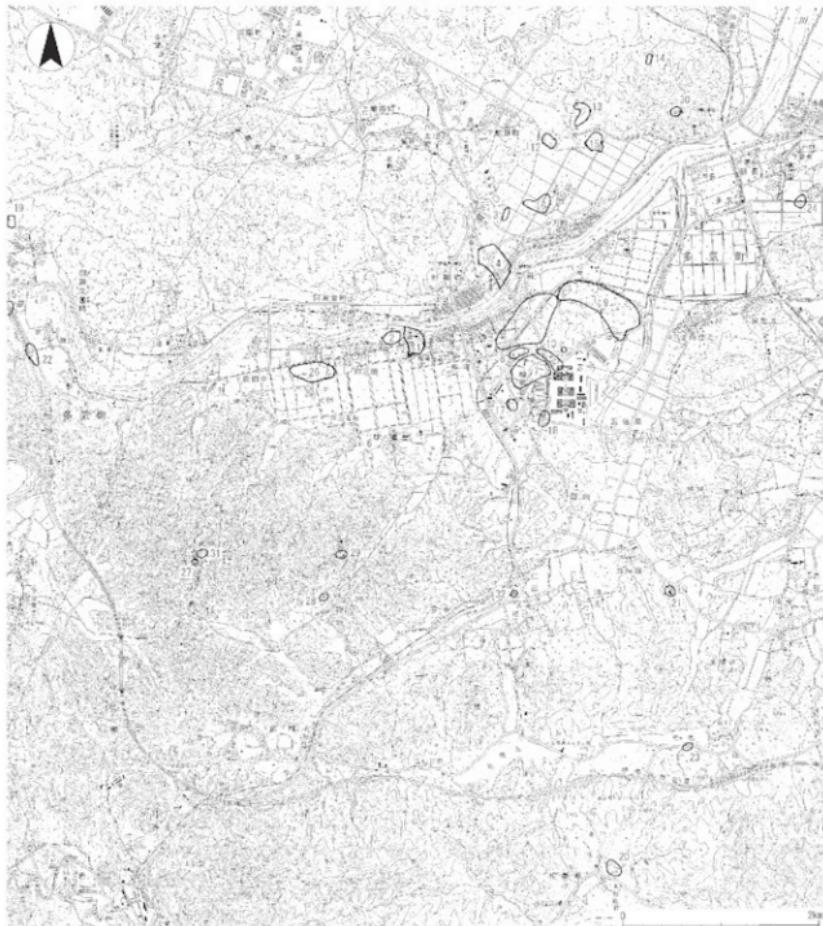
古墳時代 櫛田川と佐奈川に挟まれた丘陵地に、多くの古墳群が認められる。古墳時代後期には明氣古墳群（7）、立岡山古墳群（8）、黒田古墳群（9）、大日山古墳群（10）、河田古墳群などがみられ、6~7世紀代の須恵器や馬具が出土している。墳丘形態は円墳もしくは方墳を呈し、埋葬施設は木棺直葬と横穴式石室が主体である。石塚谷古墳（11）は部分鍍金を施した馬具や、日輪などが施された銀象眼大刀が出土している。前方後方墳のような大古墳は認められないが、古墳時代後期以降の重要な地域であったことは注目に値する。一方、櫛田川北岸の松阪丘陵沿いには尾だけ古墳群（12）、中万大谷古墳群（13）、やつで古墳群（14）が存在する。

集落について、前期では櫛田川北岸の射原塙内遺跡（15）、後期では上寺遺跡（16）で竪穴住居を検出している。またこの地域には須恵器生産窯の分布がみられ、6世紀末頃から中尾須恵器窯（17）、明氣須恵器窯（18）で操業が確認される。

飛鳥・奈良時代 櫛田川を約8km下った位置に、斎宮跡が造営される時期である。鐘突遺跡や上寺遺跡で竪穴住居や掘立柱建物が検出しているが、大規模な集落は確認されていない。

古代寺院について、まず櫛田川北岸に白鳳期の創建とされる御麻生薦麻寺（19）では、藤原宮式複弁蓮華文軒丸瓦および重弧文軒平瓦が採集されている。宮川流域の達鹿瀬麻寺（20）でも奈良時代後期の古瓦が採集されており、伊勢太神宮寺と推測される。佐奈川流域の四神田麻寺（佐奈山麻寺）（21）でも、古瓦が採集されている。

一方瓦窯をみていくと、牧瓦窯跡群（22）が、8世紀初頭から中葉にかけて操業していたとされる。牧瓦窯跡群出土瓦は、御麻生薦麻寺・丹生寺麻寺と同范のものと確認されている。西谷遺跡（櫛ヶ池瓦



1 相可出張遺跡	9 黒田古墳群	17 中尾須恵器窯	25 巢護遺跡
2 相可高校校庭遺跡	10 大日山古墳群	18 明氣須恵器窯	26 三疋田遺跡
3 鐘突遺跡	11 石塚谷古墳	19 御生薬庵寺	27 近長谷寺
4 洪ノ木遺跡	12 尾だけ古墳群	20 逢鹿瀬庵寺	28 普賢寺
5 花ノ木遺跡	13 中万大谷古墳群	21 四神田庵寺	29 金剛座寺
6 四疋田銅鐸伝承地	14 やつで古墳群	22 牧瓦窯跡群	30 神山城
7 明氣古墳群	15 射原塙内遺跡	23 西谷遺跡	31 近長谷城
8 立岡山古墳群	16 上寺遺跡	24 カウジデン遺跡	32 佐奈神社

第2図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「大河内」「松阪」「横野」「国東山」1:25,000より作成]

窓) (23) と逢鹿瀬庵寺・四神田庵寺は、生産と配給関係にあったと推測されている。

相可出張遺跡の南側には、条里型地割りが認められ、三疋田・四疋田など条里の数と里名がそのまま地名として残っている。多気郡条里はN^o W^oの方位を示す¹⁰。その施行時期については未だ不明であるが、のちの莊園制成立に向けた地域開発の発展は、古代寺院を有する勢力と密接に関わっていたと考えられる。

平安時代 櫛田川中流域の一部の水田は、京都東寺領に寄進され、川合莊・大国莊（現在の多気町兄国・弟國）となる。東裏遺跡やカウジデン遺跡（24）は役所などがあった場所と推測され、多気郡条里と関わりのある巣護遺跡（25）でも石帶や綠釉陶器が出土している。

寺院の建立が目立つ時期でもある。三疋田遺跡（26）からは12世紀に属する蓮華文軒丸瓦や巴文軒丸瓦が出土しており、瓦葺きの寺院の存在が指摘されている。近長谷寺（27）は仁和元年（885）に建立され、平安後期には本尊の木造十一面觀音が作られる。多気町神坂の普賢寺（28）、金剛座寺（29）にも平安時代に造られた普賢菩薩坐像、地藏菩薩立像が認められる。

中世以降 南北朝の動乱期には、玉城町田丸城の支城である神山城（30）、外宮神官度会家行が籠もったとされる近長谷城（31）などが認められる。

伊勢本街道は、櫛田川南岸にある相可出張遺跡のほぼ中央を走っている。相可出張遺跡から東へ500mの地点には両郡橋がかかり、櫛田川を介して多気郡・飯野郡が接している。相可集落は熊野街道が櫛田川を渡る地点に形成された宿場町で、熊野街道と伊勢本街道はここで交差している。対岸に位置する射和集落を代表例として、相可・丹生・中万は上流

の丹生地区（多気町丹生）で産出した水銀を加工する軽粉業によって発展し、中世から近世にかけて伊勢商人を輩出している。

社寺 延喜式内社佐奈神社（32）は、櫛田川の支流にある佐奈川流域に位置する。四神田庵寺（佐奈山庵寺）（21）は神宮寺と推測される。

延喜式内郷社相鹿上神社（第4図-2）は、相可一区・二区・荒蕪にあった神社を明治41年に現在の場所に合祀したもので、元々は伊蘇上神社（磯宮・磯部寺）があったとされる¹¹。相鹿上神社旧社地は、相可出張遺跡から谷を挟んで東側に位置し、現在は石標が建てられている（第4図-3）。

採集資料（第3図） 相可出張遺跡から伊勢本街道を300m東進した地点（第4図-4）で採集した。187は土師器鍋、188～190は土師器熔炉で、時期は16世紀から近世であろう。伊勢本街道沿いに、中世後期以降も集落が展開していたことを示す資料である。

〔註〕

- (1) 星野利幸 2007『神三郡の土地利用について』『斎宮歴史博物館研究要16』斎宮歴史博物館
- (2) 囲田登 1990『式内社調査報告書 第六卷』皇學館大學 [参考文献]

多気町 1990『多気町史 通史』

多気町教育委員会 1998『埋蔵文化財発掘調査報告書 多気ニュータウン相可台 一立岡山6号墳・明気古墳群-』

多気町教育委員会 1998『埋蔵文化財発掘調査報告 多気工業団地 石塚谷古墳・大日山1号墳・倉懸古墳群-』

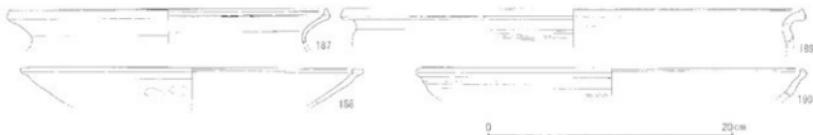
松阪市 1978『松阪市史 第二巻 資料編 考古』

三重県 2005『三重県史 資料編 考古1』

三重県埋蔵文化財センター 1995『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地発掘調査報告 I 明気窓跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・奥渡遺跡』

三重県埋蔵文化財センター 1996『相可出張遺跡発掘調査報告』

三重県埋蔵文化財センター 2008『三疋田遺跡発掘調査報告』



第3図 相可地区採集遺物（1:4）



1 相可出張遺跡 2 相鹿上神社（磯部寺） 3 相鹿上神社旧社地 4 遺物採集地点
第4図 調査区周辺地形図 (1:10,000)



第5図 調査区位置図 (1:1,000) ■ 試掘調査坑

III 遺構

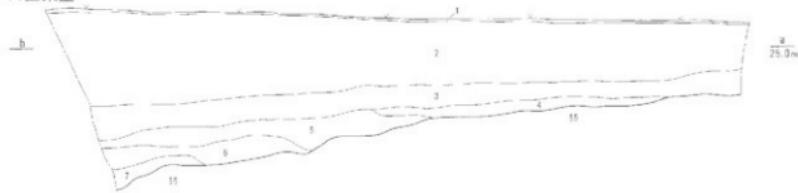
1 基本層位

調査区は、櫛田川南岸の河岸段丘上に位置する。高校の敷地内であることから大規模な造成がなされており、地形の旧状を知ることはできないが、隣接する竹林及び調査区の地山は、櫛田川に向かって南から北に傾斜している。

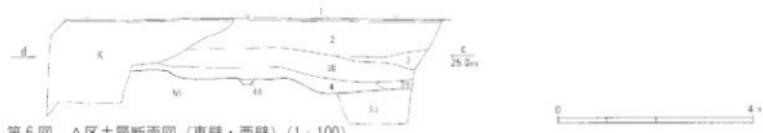
調査区周辺には昭和20~30年代まで体育馆・寄宿舎があり、解体後は駐輪場として利用されていたことから、A区西側は大規模な搅乱を受けている。なお、第1次調査で検出されたSA11・SA12は、寄宿舎に伴う石垣であり、第2次調査区内においてもSK117上面で石垣を確認した。

A区東端の現況標高は25.8mで、遺構検出面は21.4mである。調査区東側で約1.5m、西側で約1mの造成土（第6図2層）が確認される。その下に褐色土の包含層（同3層）が約50cm堆積する。傾斜している北側は包含層が厚く、第4~6層を除いた

A区東壁



A区西壁



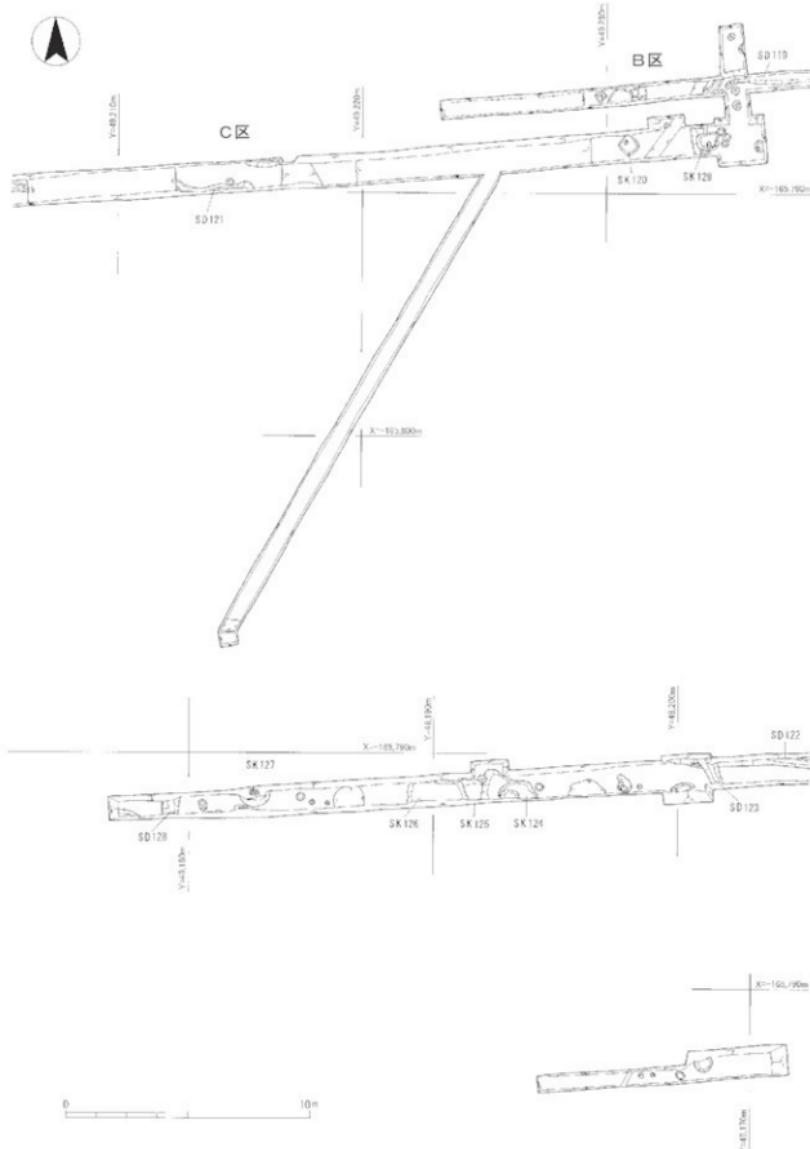
第6図 A区土層断面図(東壁・西壁)(1:100)

面で遺構検出を行った。調査区北東端には、古代以前の第7層が堆積していたが、遺物は含まれなかつた。A区北東の遺構検出面（同55層）は黒色土、いわゆる「黒ボク」で、堆積は約70~80cm。黒ボクの下で黄褐色粘質土となり、岩盤に到達する。一方、A区南西~B区・C区には黒ボクは見られず、地山は黄褐色砂質土で、遺構埋土は黒褐色土であった。なおC区工事立会時、工事の過程でさらに下層を確認したところ、SK127付近では現地表面より60cm下で黄褐色砂質土の地山にあたり、1.05m下で褐色砂質土に、1.5m下で暗褐色粗砂、1.9m下で黄灰色粗砂となることを確認している。

2 概要

A区 飛鳥時代から室町時代までの遺構を検出した。SD101は飛鳥時代後期に造られた大溝で、溝底からは祭祀遺構と考えられる石組が見つかった。SD101が平安時代末に埋没したのち、鎌倉時代

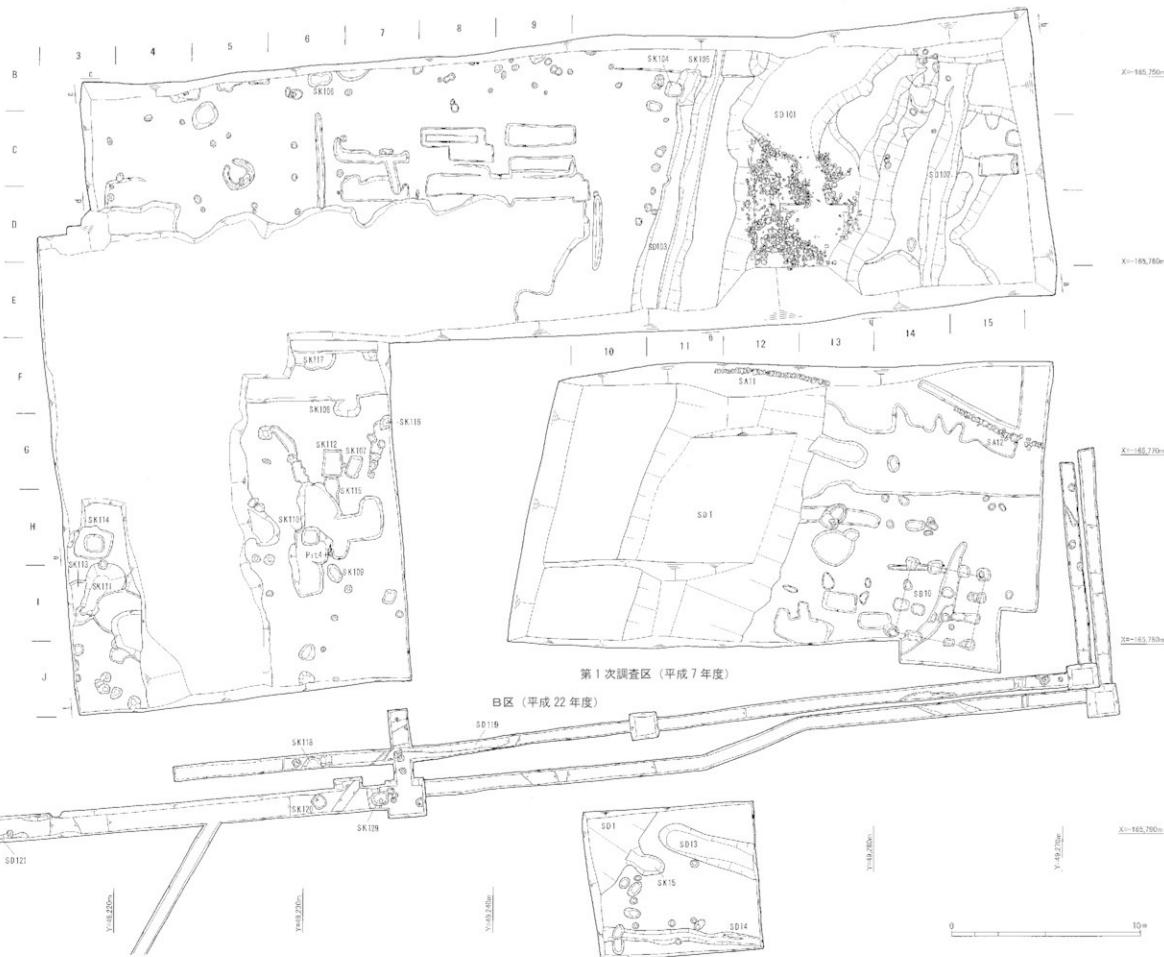
第7図 A区土層断面図（北壁）(1:100)



第8図 C区遺構平面図 (1:200)



A区
(平成 22 年度)



第9図 A区B区遺構平面図(1:200)

後半になるとSD 102、SD 103が造られる。SD 101・SD 102・SD 103は全て櫛田川に直交する溝である。このほか、調査区の西側では鎌倉時代後半から室町時代初頭の中世墓が3基見つかっており、周辺の土坑や柱穴も同時期のものと考えられる。調査区北西隅の包含層から弥生時代前期の土器が出土し、いくつかの遺構にも同時代の土器が混入していくことから、調査終了後断ら割りを入れ確認を行つたが、下層遺構は検出されなかつた。

B区 第1次調査区（現・武道場）の北側については、工事深度が遺構に達しない場合は遺構掘削せず、遺構面の検出のみ行つた。遺物は少量だが、根石を伴う中世のピットを確認した。

C区 古代の土坑SK 125を検出した。A区中世墓の北側にあたる位置からは、同時期の土坑、ピットを確認しており、屋敷跡があつたと考えられる。SK 120とSD 121の間、SD 121とSD 122の間は、旧校舎（体育館・渡り廊下）の搅乱であつた。

なお、平成23年11月に行った工事立会調査において、千鳥ヶ瀬の東岸にあたる校舎西側まで黄褐色砂質土の地山が続くことを確認した。

3 大溝 SD 101

SD 101は、飛鳥時代から平安時代にかけて機能した大溝である。相可出張遺跡において特筆すべき遺構であることから、ここでは大溝だけで独立した構成を取り、その構造について述べる。

（1）概要

SD 101は最大幅14.0m、深さ2.2mで、調査区内を南北に走る大溝である。東西に流れる櫛田川に対し直交し、造営時には僅かな流水が櫛田川に流れ込んでいたと想定される。溝底の標高は南側が21.54mに対し、北側が21.44mであり、およそ10cm差の傾斜がある。溝の方位はN 16° Eである。

溝の底には石組の施設が造られており、大溝の西岸に位置する石積・石敷を中心として、そこから櫛田川に向かう“流れ”的両側に、石貼を伴うテラス状の段が設けられる。櫛田川のある大溝北側では石組は確認されなかつたことから、調査区内において終結していると考えられる。一方南端については、調査区外まで石敷が続いているため確認できなかつ



第10図 SD 101 石組遺構 各部の名称 (1:80)

た。A 区の南側に位置する第 1 次調査区調査時は、SD 101 の最下層にあたる砂礫層上面で掘削を終えていることから、恐らく石組構造は第 1 次調査区内へと続いていると想定される。また、平成 8 年度の立会調査で SD 101 の継きと考えられる落ち込みを検出していることから、相可高校の敷地外まで伸びる可能性があり、櫛田川を終点として 100 m 以上続く大溝であることがわかる。なお、調査区北側にある竹林の現地表面には、大溝推定ライン上に僅かな窪みが確認でき、直線的に櫛田川に注いでいたと推測される。

(2) 調査の経過

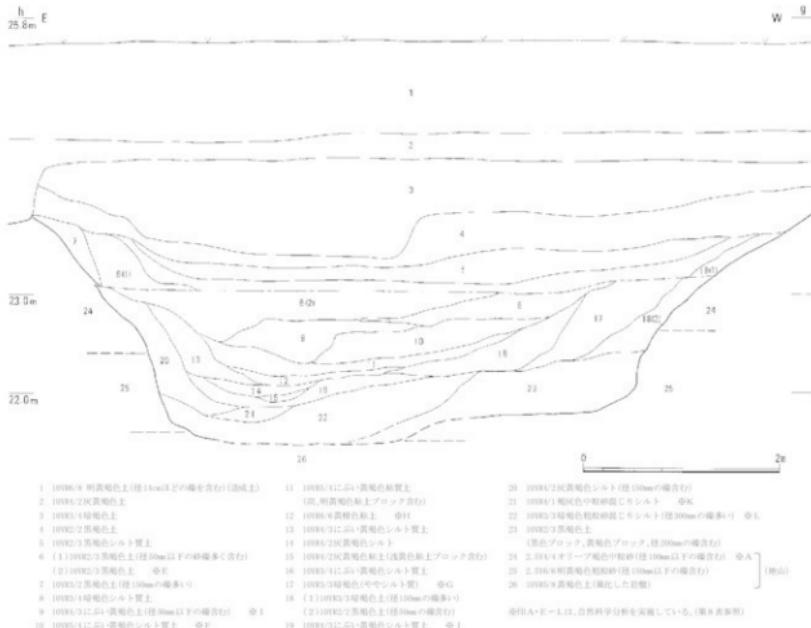
人力掘削は上層から開始し、大溝を横断する断面観察用ベルトを残しながら行った。掘削の過程で石積の最上段が露出していたが、調査時は平安時代後期の護岸と認認し、崩落した石を除去しながら最下

層上面まで掘り下がった。最下層は堅い砂礫層であつたため、人力掘削は困難と判断し、D 12～13 グリットおよびB 12～13 グリットで東西に断ち割りを入れ、地山を確認した。結果的に、断ち割りを入れたことで石組構築の一部を破壊している。

A区全ての調査が終了したのち、石積周辺を人工作業で掘削したところ、石組遺構を確認した。翌日、大溝北西端から重機が進行し、機械掘削と並行して人工作業を行い、石組遺構全体を検出した。

(3) 層序と時期

土層の観察は、調査区北壁・南壁・大溝中程に残した観察用ベルトの計3カ所で行い、断面図は北壁・南壁で作成した。遺構検出面から溝底までの深さは、調査区北壁で約2.3m、調査区中程で2.2m、南壁で1.8mである。溝埋土の層位は、上層・中層・下層・最下層の4層に大別される。最下層は疊と暗



第11図 SD 101 土層断面図（南壁）（1:50）

褐色粗砂を多く含むシルト層（北：第7図29層、南：第11図22～23層）である。径200～300mmの礫を非常に多く含む。石積南側では、崩落したと思われる石が多く認められた。出土遺物は、土師器壺・須恵器壺蓋・甕など少量である。出土状況は図化していないが、土師器壺（第23図-19～21・26）は石積の裏込めより出土したものである。須恵器壺蓋（第23図-27）は、石敷直上で石の間に挟まるよう出土した。土師器壺（第23図-24）と土師器甕（第23図-27）は、東岸テラス石貼の石と石の間から出土した。遺物の時期は、概ね都城編年の飛鳥IV期に併行することから、石組造構が機能していた時期は飛鳥時代後半（675年頃～694年頃）に比定できよう。石組の上に堆積した砂礫層は、上流からの流れ



第12図 S D 101 流路の推定 (1 : 2,500)

込みによって短期間に形成された層であると推測され、石組が地表面に露出していた期間は短期間であったと考えられる。

下層は、両岸の崩落土と溝中央部の堆積に細別される。径50～150mmの礫を含む暗褐色土層（北：第7図28・30～32層・第11図17～18層）は、石組が埋まつたのち、大溝両岸が崩落したものと考えられ、比較的多くの遺物が出土した。大溝中央部には灰褐色系シルト（北：第7図22～27層、南：第11図14～15・19層）が堆積する。北で40～70cm、南で40cm。時期は都城編年飛鳥IV期から奈良時代前半までと考えられる。

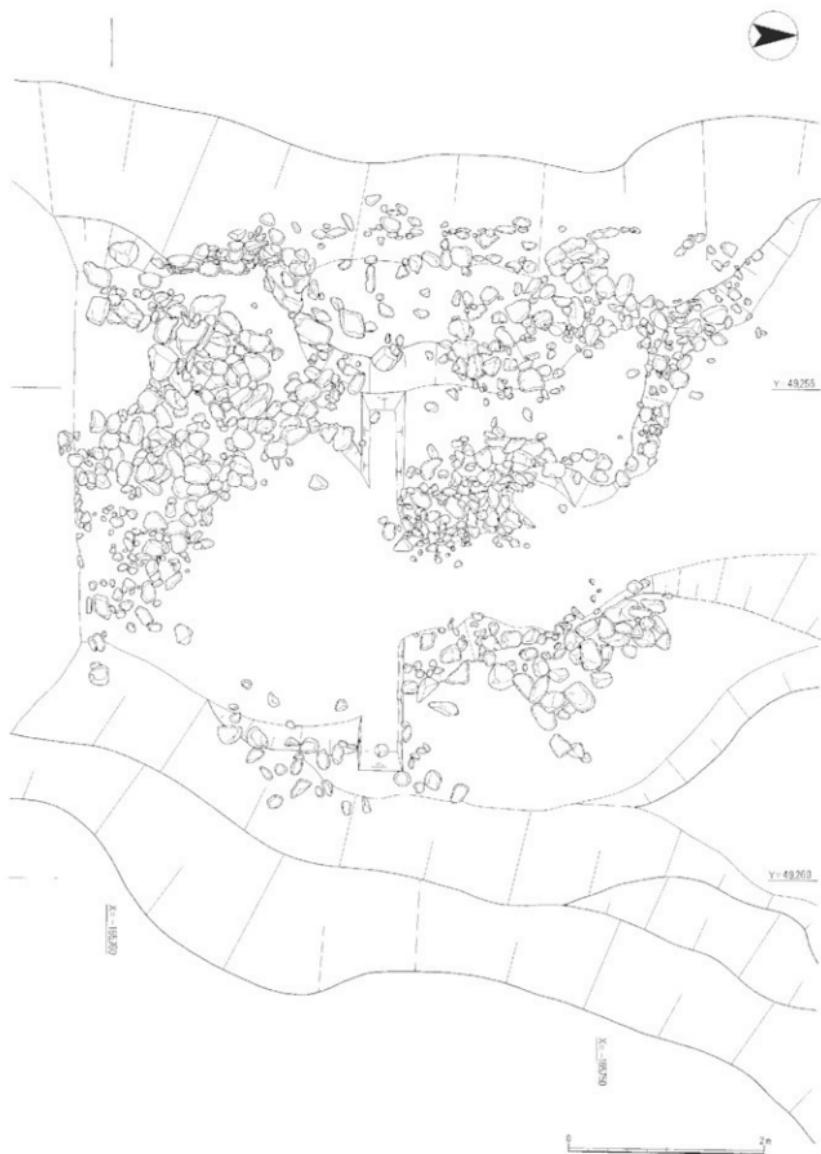
中層は、大溝中央部に堆積するにぶい黄褐色系土（北：第7図14層～21層、南：第11図9～13層、16層）。北壁で約80cm、南壁で40cmを確認し、櫛田川に近い下流部にやや厚く堆積している。遺物はほとんど含まれなかつた。

上層（北：第7図12～13層、南：第11図5層～8層）は黒褐色土で、堆積は北で80cm、南で60cmである。平安時代末期の土師器甕・ロクロ土師器が出土しており、このころまでには大溝が埋まつたと考えられる。南壁断面では溝上面中央部がややくぼんでいることから、完全な平坦面というよりは溝の形跡を残して埋まつたと考えられる。SD 101の両側に造られたSD 102・SD 103が大溝を避けるように設けられていることも、大溝上面が落ち込み状の地形となって残っていたことを示すものといえよう。

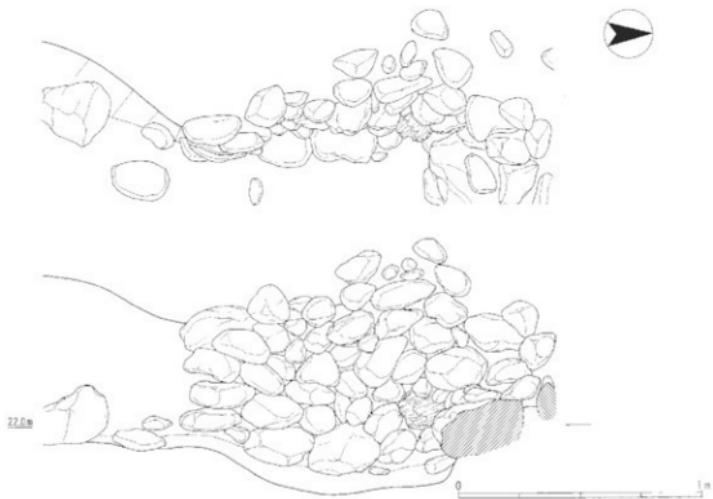
上層・中層ともに全体的に粘性の土であり、中粒砂などを含む層が認められないことから、おそらく水の流れは緩やかであったと推測される。

（4）石組造構の構成

A区内の範囲は南北幅7m・東西幅6mである。その性格については第VI章でまとめることとし、ここでは施設を構成する要素を解体し、詳細を記述する。石敷（第15～16図） 石組造構の中心的な施設である。石積と接する西側は、約50cmを測る大型の石を用い、約1.8m×約1.5mの不整形形に川原石を敷き詰めている。下段からは湧水点と考えられる遺構を検出した。湧水点は拳大以下の石を3～4石ずつ



第13図 SD 101 石組遺構平面図 (1:50)



第14図 石積 平面図・立面図 (1:20)

並べ、2段分を掘り下げている（第16図）。最下段は基盤層に達し、雨季には湧水を得ていたであろうと推測される。まず湧水点を掘り、つづいて上面を扁平な石で覆う。さらに上は、化粧石と考えられる横長扁平な石を用いて方形に組んでいる（第15図）。その周りは大型の石で不整円形を形成し、石の固定に砂利を含める。

不整円形の石敷から南側に派生し、第1次調査区に向かって続く石敷も確認している。こちらは、約10～20cm程度の石を用いて、大溝の流路を横断するように敷き詰められている。湧水点周辺に比べ、石の積み方および単位は、テラスの貼石に近い。

石積（第14図） 西岸に、10～20cm程度の大きさの川原石を約6段積み上げている。高さ約80cm、幅約1.5mが残存する。最下段のみ幅30cm程度の大きな石を横長に配している。調査時、石積の前に崩落したとみられる石が山積しており、それらを除去したのち下から石敷を確認した。したがって、本来は南側にも石積が続いている可能性がある。底面や側面の裏込めには粘土やシルトが詰められている。

西岸テラス（第17図） 西岸では、テラス状の平坦が2段確認され、上段と下段の高低差は20cmである。

上段は石積の北側に組まれた石から派生したもので、20～30cm程度の石で区画される。一方下段は東岸テラスと対になり、拳大程の貼石で流路を構成しており、洲浜状の石敷が認められる（第10図）。下段平坦面は幅約0.5～1mで、北端は大溝下端まで貼石がつながり、石組施設の終点と考えられる。

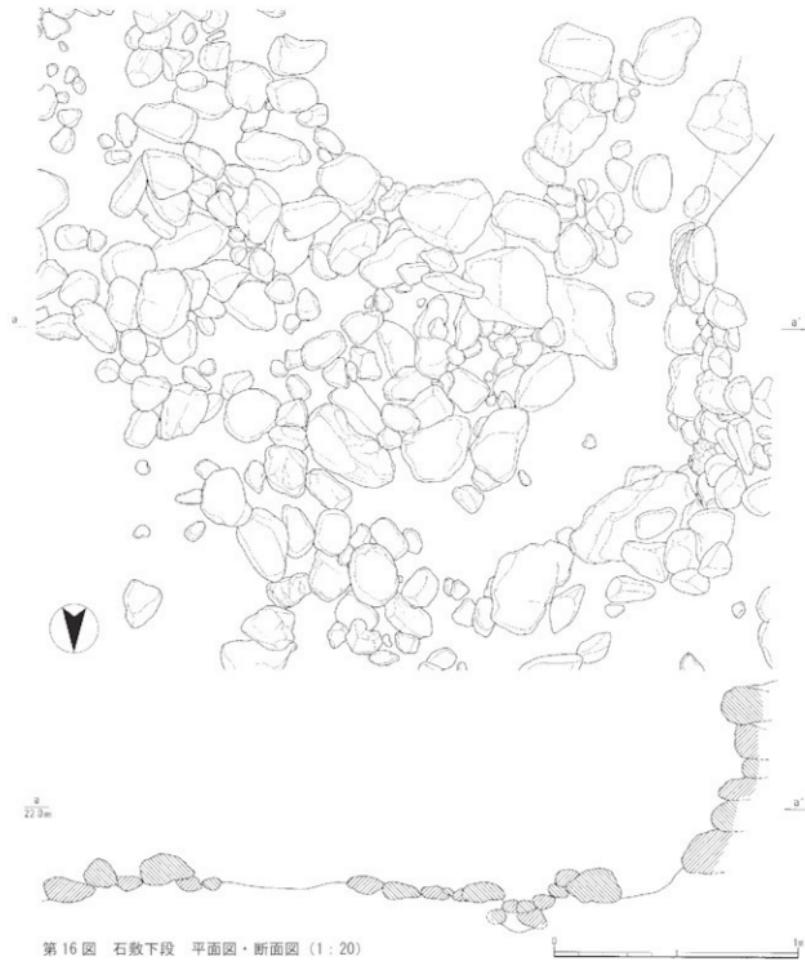
下段テラスの層序は、上層が褐色粘質土、下層が黄褐色～灰黃褐色土であった。なお石貼の隙間から炭化材が出土しており、自然科学分析を行っている。

東岸テラス（第18図） 人工的に平坦面を張り出させ、10～20cm程度の拳大の石を斜面に貼り付けることで流路を区画している。テラスの幅は1.7mで、平坦面をもつ。流路に向かって5cm程度の小縫を敷き詰めた洲浜状の範囲が認められる（第10図）。西岸にみられるような2段目テラスではなく、図化した以上の石は認められなかった。テラスの層序は、上層が灰黄色砂質土、下層が褐色粘質土（第19図）。

流路（流れ） “流れ”とは、庭園内に作られる小川の総称で、当遺跡の場合は两岸テラスによって区画された流路を指す。テラスの石貼によって構成され、两岸の石と石の間で幅約1m、洲浜状に延びる小石間では幅約50cmである。上流にあたる南側では全面



第15図 石敷上段 平面図・断面図 (1:20)



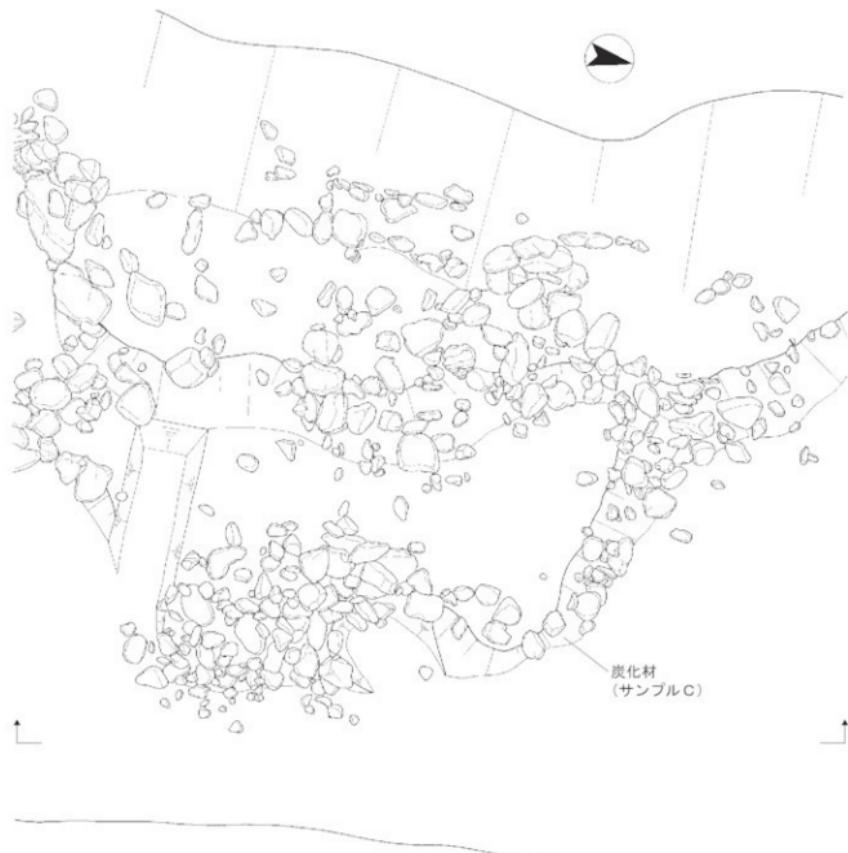
第16図 石敷下段 平面図・断面図 (1:20)



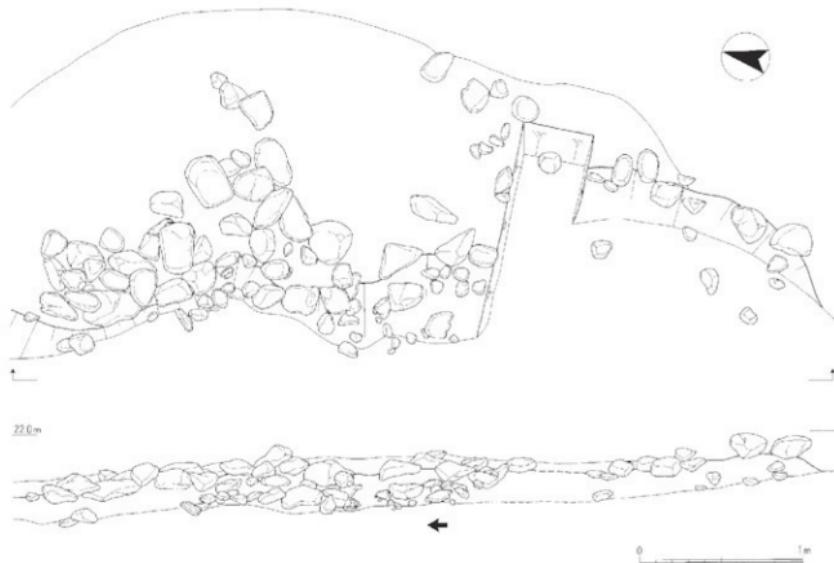
写真3 石敷上段 (東から)



写真4 石敷下段 (東から)



第17図 西岸テラス 平面図・立面図 (1 : 30)



第18図 東岸テラス 平面図・立面図(1:30)

に石が敷かれている。

湧水点と流水量の推定(第12図) 水源は2カ所である。まず石組施設内からは、石敷下段からの湧水が認められる。次に大溝上流からの流水であるが、土層の堆積状況により、石組遺構が機能していた時期には僅かな水量のみが流路に流れ込んでいたと考えられる。したがって、おそらく上流部で本流から分水し、大溝側には調節された水量のみが流れこんでいたと考えられる。

(5) 石組遺構の構築

大溝を岩盤まで掘削したのち、まず最初に湧水点を伴う石敷を造ったと考えられる。西岸上段テラスは石積の一部を利用して構築されているため、石積→両岸テラスの順が推測される。したがって、施設の中心は大溝西岸であったと考えられる。

4 古墳時代の遺構

S K 125 C区西側に位置する。S K 124・S K 126に切られており、平面形は不明であるが、遺構検出

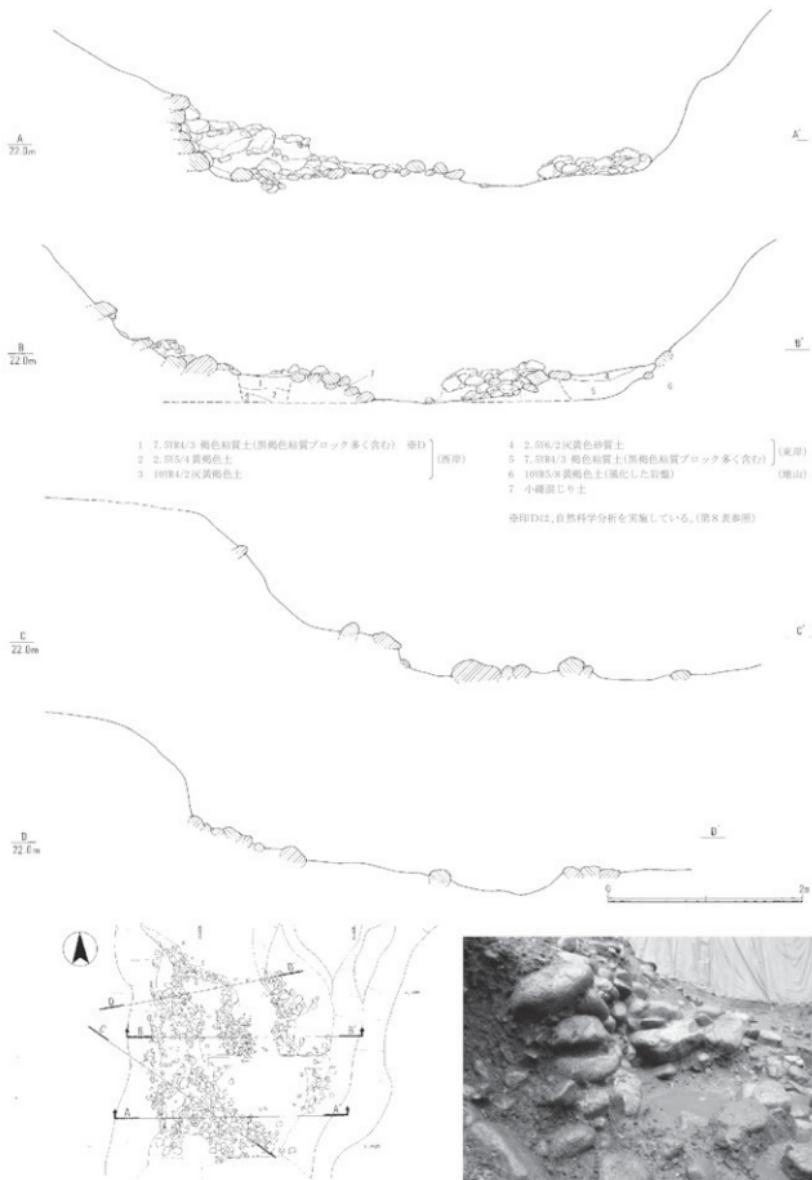
面から底面までの深さは25cmである。須恵器壺身、土師器壺、土師器甕などが出土しており、時期は古墳時代後期である。

5 古代の遺構

S B 10 第1次調査区で検出された掘立柱建物である。大溝SD 101に近接している。第2次調査において石組遺構を検出した際、第1次調査S B 10の出土遺物を再検討したため、以下に詳細を記述する。

S D 101の東岸に位置する。1辺4m、3間×3間の建物で、縦柱か側柱かは不明である。柱穴からは、高壙の脚部が2点出土している。時期は概ね飛鳥時代後期～奈良時代前半の範疇であり、大溝の機能した時期とも合致する。建物の方向はN 12° Eで、S D 101とはほぼ平行であることから、大溝と何らかの関係があったと考えられる。

S K 113 A区Ⅰ3グリッドで検出した。直径1.2～1.7mで、SK 111に切られているが、おそらく梢円形を呈する土坑である。検出面から底面までの深さは40cmで、古代の土師器壺が1点出土している。



第19図 石組造構 断面図・断面見通し図 (1:50)

写真5 石積断面 (南から)

S K 126 C区の西側に位置し、S K 125の上面で検出した。長さ2.26m、幅70cmで、四角形を呈する土坑であろう。遺構検出面から底面までの深さは18cmであった。暗文の施された土師器壺が出土しており、時期は飛鳥時代と考えられる。

A区H6P i t 4 径30~60cmの梢円形で、検出面から底面までの深さは20~30cm。須恵器壺身・壺蓋・瓶が出土しており、時期はSD 101と同じ飛鳥時代後期である。

6 中世の遺構

S D 102 A区SD 101の東側で検出した、南北方向の溝である。遺構検出面から溝底までの深さは30cm、幅1.5m、長さは調査区内で14m認められ、おそらく櫛田川まで続く溝であろう。埋土は2層で、下層は暗褐色粘質土で遺物を多く含み、上層はにぶい黄褐色砂質土である。遺物は土師器小皿・皿・甕・羽釜などがある。時期は室町時代と考えられる。

S D 103 A区SD 101の西側で検出した南北方向の溝である。遺構検出面から溝底までの深さは約50cm、幅2.4m、長さは調査区内で14m認められるが、SD 102同様おそらく櫛田川まで続く溝であろう。埋土は大きく3層で、最下層は灰黄褐色粘質土、中層は黒褐色土、上層は黒褐色粘質土である。遺物は土師器皿・甕・山茶碗などがあり、土師器香炉は溝北端の最下層から出土した。時期は、鎌倉時代後半から室町時代初頭と考えられる。

S K 104 A区B 11グリッドで検出し、SD 103に隣接している。長さ80cm、幅70cm、遺構検出面からの深さは18cmである。浅い土坑で、ほぼ正方形を呈している。埋土は褐色粘質土であった。「上上」?と墨書きされた山茶碗が出土している。

S K 107 (第20図) A区G 7グリッドで検出した中世墓である。長辺1.2m、短辺72cmの隅丸長方形で、検出面から底面までの深さは約40cmである。埋土は黒褐色砂質土で、北隅にまとめて遺物が出土した。

出土遺物は土師器小皿6枚・皿2枚・土師器鍋2点である。土師器小皿は西側にまとめており、数枚が重なった状況で出土した。土師器皿は土坑のほぼ中軸上で上向きに出土した。土師器鍋は2点が重なった状態で出土しており、どちらも伏せられて置

かれていた。下で潰れていたが接合後はほぼ完形になるもの(第26図-139)と、上にあり完形のまま出土したもの(第26図-140)があり、どちらの鍋も体部外面から内面向かって穿孔が1ないし2ヵ所穿たれ、外面には煤が付着している。このことから、日常雑器として用いた鍋を副葬品として使用したと考えられ、穿孔は埋納時に行ったと推測される。

S K 110 A区H 6グリッドで検出した土坑で、上面は擾乱を受けており平面形は不明である。長辺約1m、短辺40cmが残存する。土師器皿・山茶碗などが出土しており、時期は鎌倉時代であろう。

S K 111 A区I 3グリッドで検出した。南北に3.7m、東西に2mの土坑で、検出面から底面までの深さは74cmである。南東隅が擾乱を受けるが、梢円形を呈すると推測される。土師器小皿・皿・山茶碗が出土しており、時期は鎌倉時代であろう。

S K 112 (第20図) A区G 6~G 7グリッドで検出した中世墓である。南北方向の土坑で、平面形は長辺1.45m、短辺0.94mの長方形である。北側で土師器小皿2点と腰刀がまとまって出土した。時期は鎌倉時代後期から室町時代初頭と考えられる。

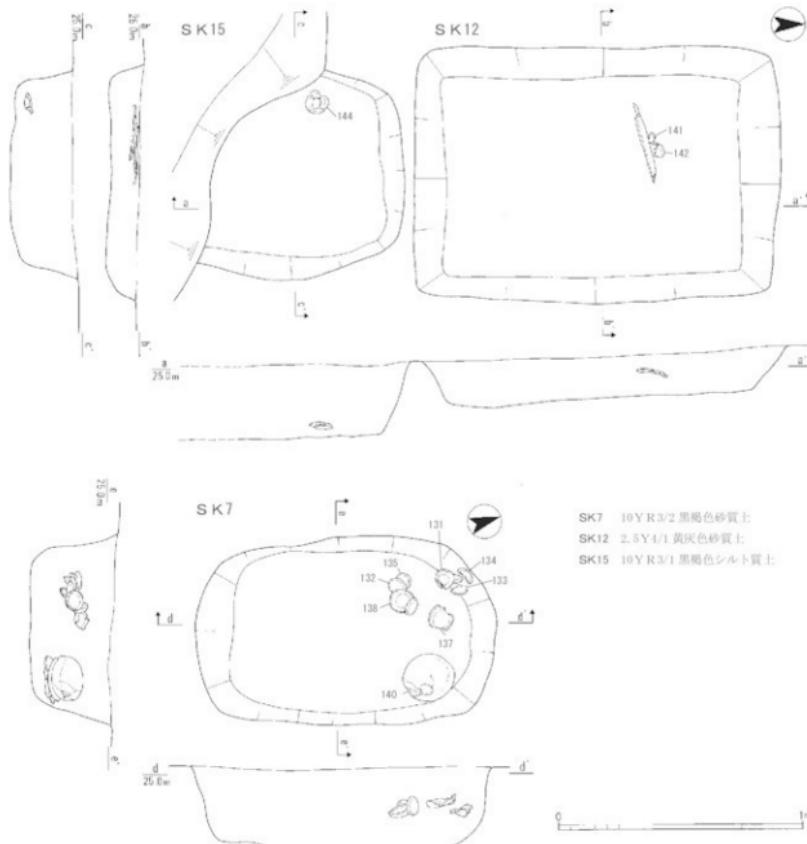
S K 114 A区H 3グリッドで検出した土坑である。遺構検出面は長方形で、1辺約2mの正方形で、土坑中央部に1辺1m、深さ30cmの落ち込みが認められるが、性格は不明である。出土遺物は土師器小皿・皿・青磁碗・山茶碗で、時期は鎌倉時代である。

S K 115 (第20図) A区G 6グリッドで検出した中世墓である。南側は擾乱により不明であるが、南北1.4m以上、東西74cmの隅丸方形を呈する。北隅から土師器小皿・皿が出土しており、時期はSK 107・SK 112と同様に鎌倉時代後期から室町時代初頭と考えられる。

S K 117 A区F 6グリッドで検出した。旧校舎の擾乱を受ける。東西2.3mの方形土坑で、底部に墨書き「十」のある山茶碗が出土した。時期は鎌倉時代である。

S K 118 幅1mの土坑である。工事深度が遺構検出面より上であったため、上面検出のみ行っている。井戸の可能性が考えられる。時期は中世か。

S K 120 C区東側で検出した。一辺80cmの土坑で、ほぼ正方形を呈している。検出面から底面までの深



第20図 中世墓出土状況図 (1:20)

さは約30cmである。実測はしていないが、渥美産の山茶碗口縁片が出土しており、藤澤編年第5型式併行期、時期は12世紀後半と考えられる。

SK121 C区で検出した。長さ3.3m以上、幅約46cmの東西溝で、底面までの深さは約13cm。SD122と同一の溝である可能性があるが、旧校倉(渡り廊下)の擾乱により不明である。土師器鍋・羽釜・山茶碗片が出土しており、15世紀前半と考えられる。

SK122 C区で検出した。長さ6.4m以上、幅約30cmの溝で、深さは40cm。時期は15世紀前半か。

SK127 C区で検出した。径1.22以上の円形の土坑である。中央に集石がみられるが、性格は不明である。室町時代の大型椀が出土している。

ピット群 根石を伴うピット群は、B・C区のはば中央部(A区J7グリッドの南側)、SK129周辺に位置する。いずれも径0.3~0.6mの円形および梢円形で、深さは0.2m~0.3mである。掘立柱建物の柱穴を構成するものと考えられる。時期は概ね鎌倉時代末から室町時代であろう。

7 平成8年度立会調査区の遺構

試掘調査は平成5年5月、立会調査は同年11月5日に行われた。立会調査は未報告であるため、平成22年度調査と併せてここに記述する。

部室建築予定地の予定範囲約100m²のうち、旧体育館基礎による擾乱を受けた部分を除く約45m²について実施された。

S D 1 調査区北西端で検出した構（落ち込み）で、

S D 101 (S D 1) の続きと考えられる。遺物は12世紀初め頃と思われる山茶碗が出土している。

S D 13 幅約1.3m、深さは約0.6mで、西に向かって0.3mほど傾斜している。遺物は鎌倉時代後半から室町時代初頭の土師器片である。

S D 14 幅約0.5m、深さ0.1m程度のごく浅いもので、遺物は土師器鍋の小片、陶器片である。時期はSD 13と同じ時期と考えられる。（相場）

第1表 遺構一覧表

調査次数	南西方向 測量 番号 番号	調査方 向 測量 番号 番号	性格	時期	地区	長S 長径 (m)	幅 側径 (m)	深さ (m)	備考
18年度立会調査	SD13	SD1	漢	鎌倉末～室町初期	—	—	1.3	0.6	
18年度立会調査	SD14	SD2	漢	鎌倉末～室町初期	—	—	0.5～ 0.6	0.1	
18年度立会調査	SK15	SK3	土坑	不明	—	1.5	1.0	0.3	
18年度立会調査	SD1	SK4	漢	～鎌倉時代初期	—	—	—	1.2	1次調査SD1、2次調査SD101と同一。
H22年度A区	SD101	SD1	大漢	飛鳥後期～平安末期	B12～E13	14.0～	9.5	2.2	棚田川に直交する。 段丘上に石組垣を検出。
H22年度A区	SD102	SD2	漢	室町時代	B14～E14	14.0～	1.5	0.3	棚田川に直交する。
H22年度A区	SD103	SD3	漢	鎌倉末～室町初期	B11～E11	14.0～	2.4	0.49	棚田川に直交する。 西側で一段下がる。(0.3m)
H22年度A区	SK104	SK4	土坑	鎌倉時代か	B11	0.8	0.7	0.18	
H22年度A区	SK105	SK5	土坑	鎌倉時代	B11	1.90	1.00	0.44	SK104に切られる。
H22年度A区	SK106	SK6	土坑	不明	B6	1.25	0.68	0.16	
H22年度A区	SK107	SK7	中世墓	鎌倉末～室町初期	G7	1.2	0.72	0.41	土師器鍋、皿、小皿出土。
H22年度A区	SK108	SK8	土坑	不明	F7～G7	1.4	0.59	0.35	
H22年度A区	SK109	SK9	土坑	不明	I6	1.0	0.7	0.2	
H22年度A区	SK110	SK10	土坑	鎌倉時代	H6	0.95～	0.4～	0.34	上面は擾乱を受ける。
H22年度A区	SK111	SK11	土坑	鎌倉時代	I3	3.7	2	0.74	
H22年度A区	SK112	SK12	中世墓	鎌倉末～室町初期	G6～G7	1.45	0.94	0.2	SK107に隣接。 刀、土師器小皿出土。
H22年度A区	SK113	SK13	土坑	飛鳥後半～奈良前半	I3	1.7～	1.2～	3.9	SK111に切られる。
H22年度A区	SK114	SK14	土坑	鎌倉時代	H3	1.95	1.8	0.68	正方形。 中央部が一段落ちる(0.3m)。 南北に擾乱を受ける。
H22年度A区	SK115	SK15	中世墓	鎌倉末～室町初期	G6	1.4～	0.74	0.26	土師器皿、小皿出土。
H22年度A区	SK116	SK16	土坑	鎌倉時代	G7	0.9	6.0	0.39	
H22年度A区	SK117	SK17	中世墓か	鎌倉時代	H6	2.3～	1.0	0.4	北側は旧校舎の擾乱を受ける。
H22年度B区	SK118	SK1	土坑	中世か	—	1.0	0.55～	不明	中世の井戸か？(未完題)
H22年度B区	SD119	SD1	漢	鎌倉時代か	—	5.6～	1.0～	0.42	
H22年度C区	SK120	SK20	土坑	鎌倉時代	—	0.8	0.8	0.32	
H22年度C区	SD121	SD21	漢	室町時代	—	3.3～	0.46～	0.13	SD122と同一か。
H22年度C区	SD122	SD22	漢	室町時代	—	6.4～	0.31	0.40	SD121と同一か。
H22年度C区	SD123	SD23	漢	古代か	—	1.2	0.51	0.11	11世紀以前か。
H22年度C区	SK124	SK24	土坑	室町時代か	—	2.26	1.2～	0.53	
H22年度C区	SK125	SK25	土坑	古墳後期	—	0.92～	0.81～	0.28	SK121、SK126に切られる。
H22年度C区	SK126	SK26	土坑	飛鳥後半	—	2.56	0.7～	0.18	
H22年度C区	SK127	SK27	土坑	室町時代	—	1.22	0.82～	0.31	中央に集石が認められる。
H22年度C区	SD128	SD28	漢	室町時代	—	0.7～	0.7	0.42	
H23年度C区	SK129	SK29	漢	鎌倉後半～室町初期	—	0.9	0.7	0.27	

IV 遺 物

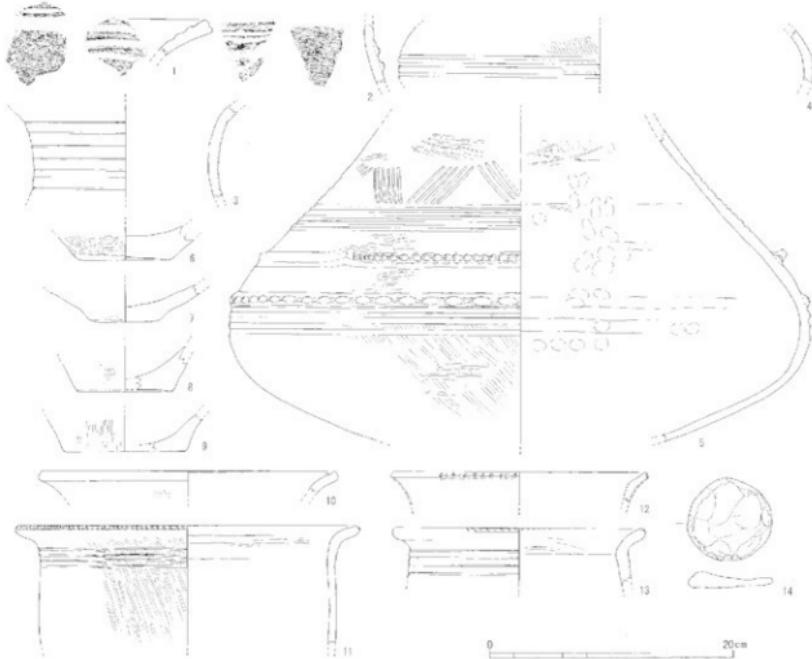
相可出張遺跡第2次調査A区・B区・C区で出土した遺物は、コンテナケース22箱、重量34.35kgである。

以下では遺物の特徴を、まず時期ごとに区分し、次に遺構単位で記述するが、SD101は遺物量が突出して多いため、SD101のみ別項を設けた。さらに、弥生時代前期の遺物は包含層からの出土もしくは混入品であるため、一括して扱った。遺物個々の詳細については遺物観察表(第2~7表)を参照されたい。

土器の器種名称および年代について、古代の土師器は飛鳥・藤原京編年²⁵須恵器は田辺昭三氏の編年²⁶、南伊勢系土師器は伊藤裕偉氏の編年²⁷、山茶碗は藤沢良祐氏の編年²⁸にしたがって記述する。

1 弥生時代の遺物(第21図)

いずれも弥生時代前期で、いわゆる「亜流速賀川式土器」にある²⁹。1~8は壺である。1は口縁端部に沈線がめぐり、口縁部内面が凹線状となる。2~3は頸部片で、2は外面に突帯と沈線、3は外面に沈線がみられる。4~5は体部片で、5は体部外表面をハケ調整したちミガキを施し、肩部にはヘラ状工具で山形文・直線文などを施している。体部最大径付近には、押し引き状の刻目文が加飾される。6~9は壺もしくは甕の底部。10~13は甕の口縁部である。口縁端部に板状工具による刻目を施すものが多く、11~13は肩部に半截竹管による沈線がめぐる。14は結晶片岩の加工円盤で、側面は使用時に



第21図 包含層出土遺物実測図(1:4)

摩滅している。

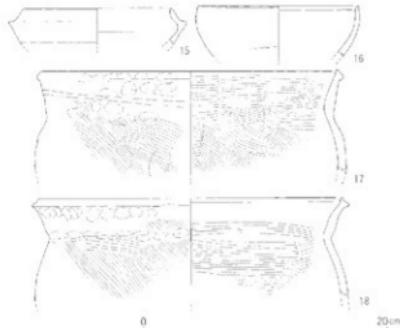
2 古墳時代の遺物 (第22図)

S K 125 出土遺物 15は須恵器坏身である。破片資料のため口径および角度は任意であるが、時期はTK 209型式併行期前後と考えられる。16は土師器の丸底鉢で、時期は6世紀後半か。17は把手付鉢で、把手が欠損している。18は把手付鉢もしくは土師器甕である。17-18の体部外面はハケ調整で、ハケの原体は内外面で同一である。時期は、古墳時代後期の範疇で捉えられよう。

3 S D 101 の遺物 (第23-25図)

S D 101 最下層出土遺物 19-20・22は土師器坏Aである。19は内面にタテミガキがみられる。20は東岸テラスの上面で出土しており、外面の一部に煤が付着している。22は小型の坏Aである。21は土師器皿Aで、内外面ともにヨコミガキが施される。23-25は土師器坏Cで、いずれも外面にオサエがみられる。26は坏の底部に「*」印のヘラ記号がある。27は瓶の口縁部で、内外面ともにハケ調整。28-30は甕の口縁部である。

31は宝珠つまみのつく須恵器坏蓋で、口縁部が一部欠損しているが、ほぼ完形である。胎土は精緻で、猿投産の可能性がある。口径9.4cmとやや小さく、陶邑編年ではTK 46型式併行期と考えられる。32は須恵器坏身で完形品。31と同じくTK 46型式併行期と考えられる。33は擦り石で、SD 101最下層から出土したことから飛鳥時代の遺物としたが、それ



第22図 SK 125 遺物実測図 (1:4)

以前の混入品の可能性がある。

S D 101 下層出土遺物 34-39は土師器坏Aである。底部と体部の境は明瞭に屈曲し、口縁端部は内側に幅の狭い強いナデを加えているものが多い。都城では内面に放射状暗文を施すものが多いが、相可出張跡のものは無文が主体である。35は内面に放射状の暗文を施す。36は外表面に煤が付着している。39は体部外面が、「C手法」と呼ばれる外調整をヘラケズリのみで終わるものとなっているが、これはミガキ調整を省略したもので、時期的にはC手法の盛行期以前のものと考えられる。

40-45は土師器坏GないしはCの在地形で、小さな丸底あるいは緩やかな丸底で、斜め上に開く口縁部をもち、口縁端部は内傾する。いずれも外面にナデ・ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。46-48は土師器坏Gである。土師器坏Gは古墳時代から認められる器種で、「いなか風椀」とも呼ばれる椀形の土器である。いずれも平底で、外調整は基本的に粗雑なナデ調整で、オサエの痕跡が残っている。47は底部に「×」のヘラ記号が認められる。49は土師器坏Aもしくは坏Cの底部で、「×」と思われるヘラ記号が書かれている。

50-55は須恵器である。50は坏身で、底部が丸味をもち、坏部内面に「×」と思われるヘラ記号がある。51も坏身であるが、平らな底部から口縁部が直線的に開くタイプである。52は壺の口縁部で、外面に自然釉が付着している。53はおそらく平瓶の口縁部で、頸部外面に沈線が1条めぐっている。54は高坏の脚部で、内面に灰が付着する。55は須恵器壺の底部で、外面に平行タタキが下から上に向かって施される。内面には同心円状のタタキがみられる。

56-64は土師器甕。58-59は径12-14cmの小型甕である。61-63は口縁部中程が肥厚しており、やや古い様相を示す。65-68は土師器の大型甕もしくは把手付鉢で、65は体部外面にナナメ方向のケズリ。

69-70は土師器甕。69は3片に分かれるが、胎土・調整などから同一個体と考えられ、把手は欠損している。70はハケの原体が細かく、器壁が薄い小型品である。

下層の時期は、須恵器坏身の形態から陶邑編年TK 46型式併行期前後に比定されよう。土師器都城編

年では飛鳥IV期—平城I期にかけての範疇でおさまることから、飛鳥時代後期から奈良時代前半と考えられる。

S D 101 上層出土遺物 71—75はやや古い様相を示し、平安前期の遺物である。71—72は土師器壺で、時期は9世紀前半か。73は土師器皿で、調整はヨコナデ。74—75は瓶か鍋の把手である。74は摩訶が著しく外面調整は不明であるが、口縁端部が内傾する。

76から82は陶器柄（以下山茶碗）で、76—77が口縁部、78—82が高台部のみ残存する。一部の底部にモミガラ压痕がみられる。产地は76—78が渥美、79—81が知多・猿投、82が知多である。時期は藤澤編年の第4型式併行期に比定できよう。

83—90は土師器甕である。いずれも口縁端部は内側に肥厚し内傾する面をもつもので、時期は平安時代後期。91—100は底部に糸切痕のあるロクロ土師器椀の底部で、時期は11世紀前半頃か。101は土師質の土錐で、孔径0.45cm。

102—103は平成8年度立会調査S D 1上面で出土した山茶碗で、98は小椀、99は椀底部。いずれも渥美産で、藤澤編年の第4—5型式併行期であろう。

上層出土遺物は時期幅があるが、概ね平安前期から平安時代末期にかけての時期に収まるものである。

4 古代の遺物（第25図）

S K 113 出土遺物 107は土師器壺で、時期は飛鳥時代後期から奈良時代前半と考えられる。

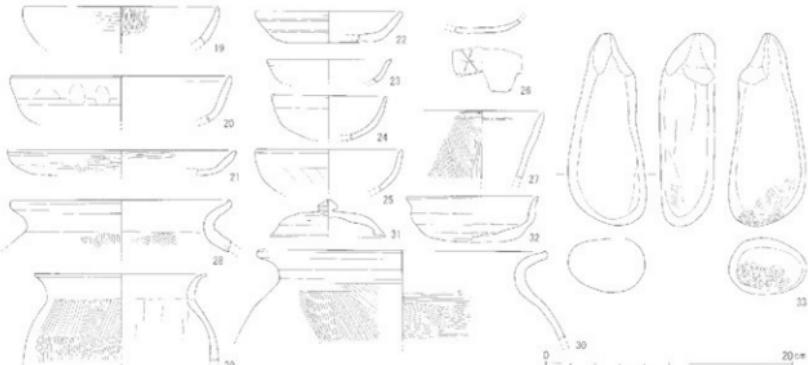
S K 126 出土遺物 108は土師器壺Aで、外面はナデのち粗いヨコミガキ。内面は斜格子状の暗文が施される。時期は飛鳥時代後半か。

A区 H 6 P i t 4 出土遺物 104は宝珠つまみのつく須恵器壺蓋で、胎土はやや粗雑で在地産の可能性がある。105は須恵器壺身。106は甕の口縁部である。時期はTK 46式併行期と考えられ、SD 101最下層と同時期にあたる。

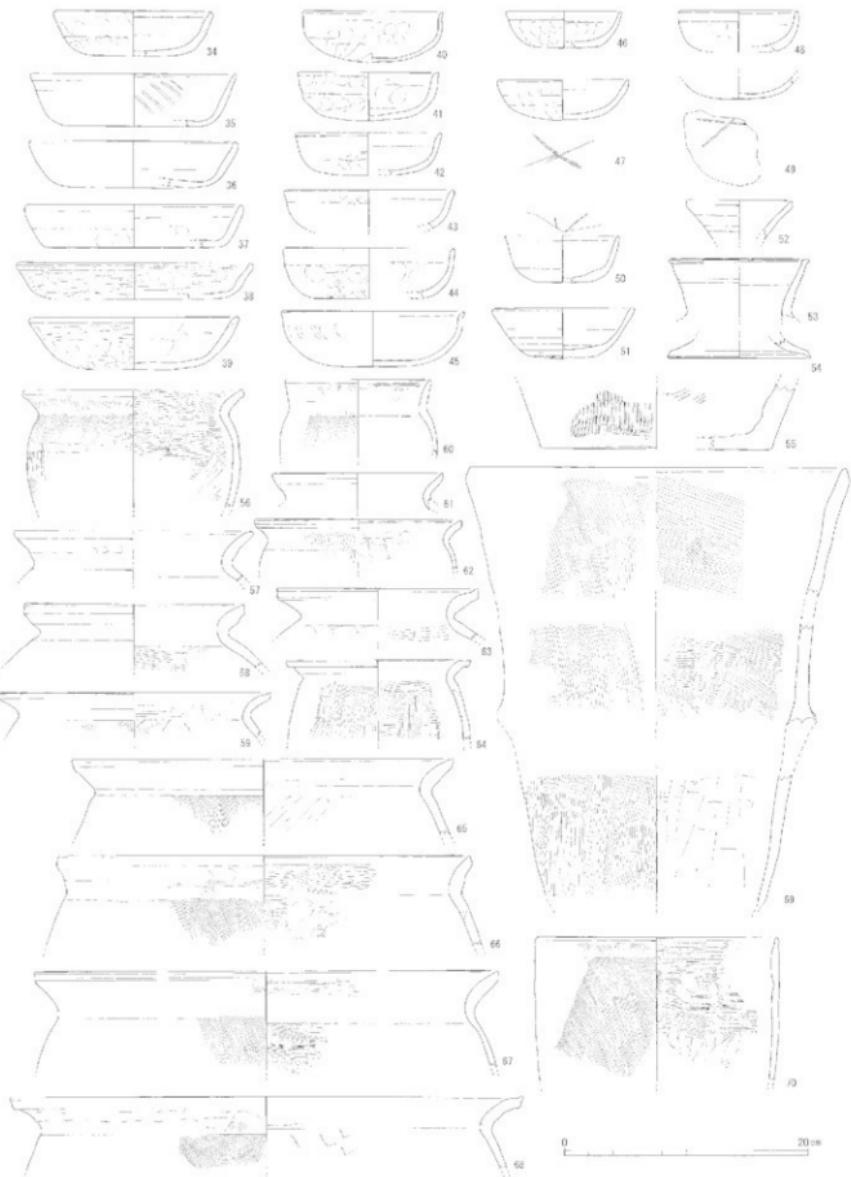
5 中世の遺物（第26—27図）

S D 102 出土遺物 109は土師器小皿、110—111は土師器皿である。112は渥美産の陶器壺で、外面調整は回転ナデである。113—114は土師器羽釜である。115—117は甕の口縁部で、116—117の口縁部外面には煤が付着している。甕の口縁部形態は南伊勢系土師器編年III b期で、時期は15世紀前半。

S D 103 出土遺物 118—119は土師器皿で、器壁が薄く、13世紀末から14世紀初頭のもの。120は甕の口縁部で、内面に板状工具痕がみられる。土師器の形態は、伊藤編年のIII a期にあたると考えられる。121は最下層から出土したもので、陶器製香炉を模倣した土師器と考えられる。平坦にナデ調整した底部に、短脚を4方向に配し、外面をケズリ調整している。122のロクロ土師器小皿は混入であろうか。123—130は山茶碗で、藤澤編年の尾張型第4・5型式併行期と考えられる。产地は123・125—130が渥美産で、121が知多・猿投産。時期は土師器と山茶碗から、



第23図 S D 101 最下層出土遺物実測図 (1:4)



第24図 SD 101下層出土遺物実測図 (1:4)

14世紀中頃から後半と考えられる。

S K 107 出土遺物 中世墓出土遺物である。131～146は土師器小皿で、口径は7.6～8.0cm。137～138は土師器皿で、口径は11.8cm。139～140は土師器鍋で外面に煤が付着しており、140には五徳の使用痕が認められる。139は胴部最大径付近に外面から内面向かって焼成後穿孔が1カ所認められる。140にも同様の焼成後穿孔があるが、139に比べやや小さく、胴部下半部分に2カ所穿たれる。時期は伊藤編年のIIIa期にあたる14世紀半中葉と考えられる。

S K 112 出土遺物 中世墓出土遺物である。141～142は土師器小皿で、径は7.7cm～8.0cm。143は鉄製の腰刀である。残存長32.6cmで、柄の先端は欠損していると考えられる。幅は茎部1.8cm、刀身3.0cm、厚みは茎部0.5cm、刃棟で0.8cm。S K 107に隣接する中世墓で、同時期のものと考えられ、時期は14世紀中葉と推測される。

S K 115 出土遺物 中世墓出土遺物である。144～145は土師器小皿、146は土師器皿。時期は14世紀中頃と考えられる。

S K 104 出土遺物 147は渥美産の山茶碗で、藤澤編年の第5～6型式併行期。時期は13世紀か。

S K 111 出土遺物 148～149は土師器小皿、150は土師器皿で、伊藤編年のIIb期と考えられる。151は山茶碗で、藤澤編年第6型式である。時期は13世紀中頃と考えられる。

S K 110 出土遺物 152は土師器皿である。153～156は山茶碗で、産地は153・155が知多・猿投産、154・156が渥美産。155は藤澤編年の第6型式にあたり、時期は13世紀中頃である。157は土師器鍋、158は陶器の鍊鉢で、おそらく高台を省略した片口鉢であろう。時期は13世紀中頃である。

S K 114 出土遺物 159～160は土師器小皿、161は土師器皿である。162～163は山茶碗で、産地は知多・猿投と渥美で、藤澤編年第4～5型式。164は青磁碗で、外面に鑄造弁文が施される。162は青磁の加工円盤で、高台を残して削っている。底部内面にヘラ片彫りの花文が施される。時期は伊藤編年IIb期と考えられ、13世紀中頃から後半である。

S K 121 出土遺物 166は土師器羽釜で、伊藤編年のIIIb期と推定され、時期は15世紀前半である。

S K 122 出土遺物 167～168は渥美産と知多・猿投産の山茶碗で、藤澤編年の第6型式と考えられる。169は土師器碗で、貼付高台を有し底部を丸く成形するものである。170は古瀬戸の陶器で、筒形容器の可能性がある。回転ナデで成形後に釉薬をかける。瀬戸市山口八幡2号窯に類例が認められる⁶⁾。171～173は土師器鍋・羽釜で、伊藤編年のIIIb期にあたる。時期は15世紀前半と考えられる。

S K 116 出土遺物 174は山茶碗である。渥美産で、内面に漆が付着している。内面に薄く自然釉がかかる。時期は藤澤編年の第5型式併行期であろうか。

S K 117 出土遺物 175は山茶碗で、底部に「十」の墨書がみられる。渥美産で、藤澤編年第6型式である。時期は13世紀中頃と考えられる。

S K 127 出土遺物 176は土師器楕形鉢。おそらく貼付高台を有するもので、時期は15世紀前半か。

B区P i t 1 出土遺物 177は青磁碗の口縁部。龍泉窯系のもので、内面に2本の区画状線文がある。

包含層出土遺物 179は土師器碗で、底部をハケ調整で丸く成形したのち高台を貼り付けるもので、169・176と同一器種と考えられる⁷⁾。これらの出土事例は旧多気郡・飯野町内に集中している。180～182は山茶碗で産地は全て渥美産であるが、182は高台と体部の素地が異なる。183は土師器鍋。184は常滑産の陶器甕で、時期は13世紀末から14世紀初頭と考えられる。185～186は鉄製の鍔と釘で、時期はおそらく中世であろう。

(相場)

[註]

(1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅷ』奈良国立文化財研究所学報第26冊 1976、奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原京発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第31号 1978、奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告XVI』奈良文化財研究所学報第70冊 2005

(2) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

(3) 伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と堀そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996、「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2 2008

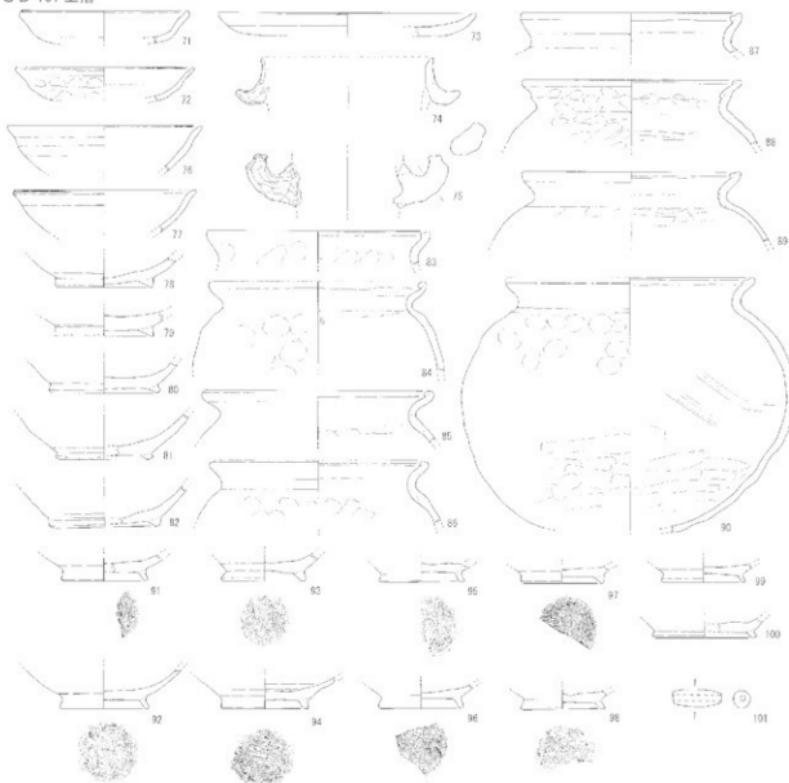
(4) 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』三重県立文化財センター 1994。なお、山茶碗の産地については、伊藤裕偉氏のご教示による。

(5) 鈴木克彦「『垂露連賀川式土器』再考」『Miehistory』1990

(6) 瀬戸市歴史民俗資料館『研究紀要X』1991

(7) 前掲 伊藤裕偉 2008

SD 101 上層



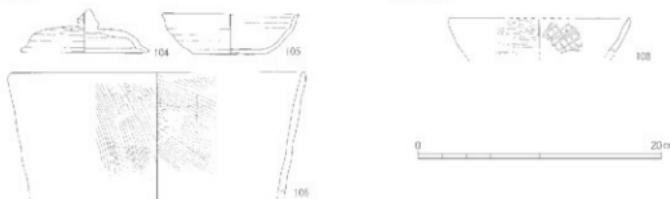
SD 1 (平成8年度工事立会調査区)

SK 113

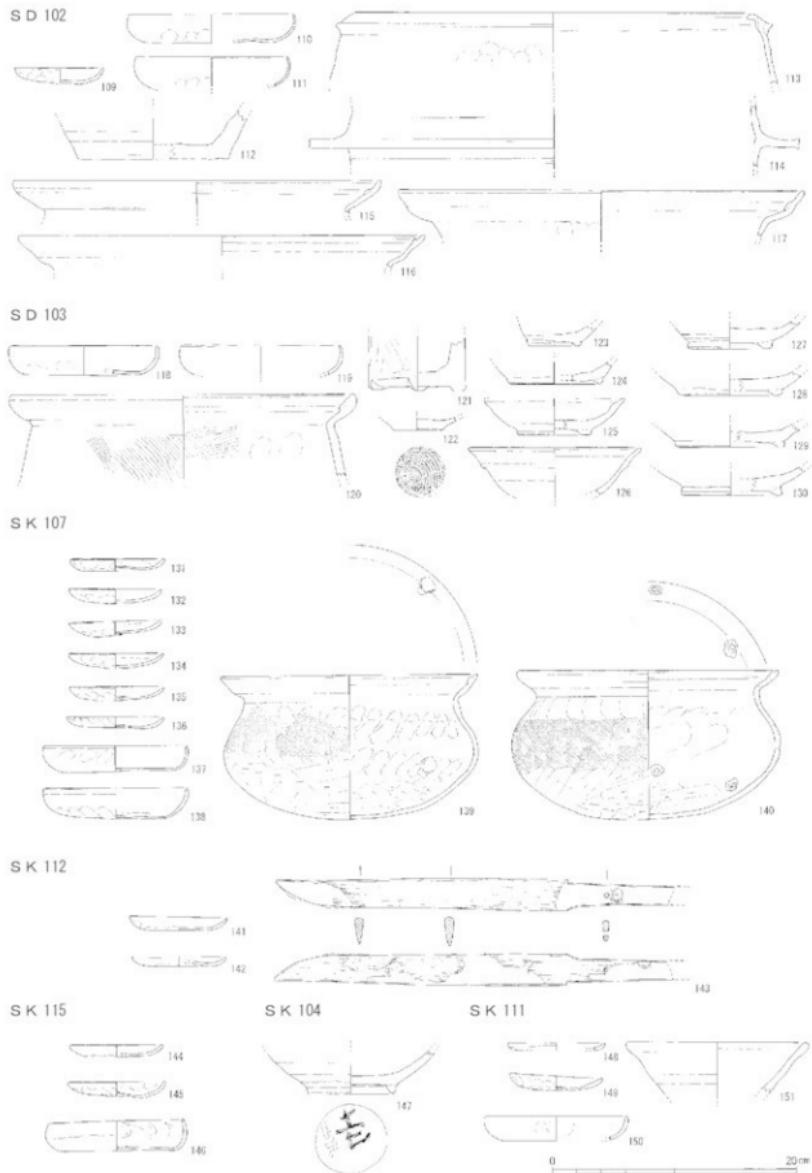


A区 H 6 Pit 4

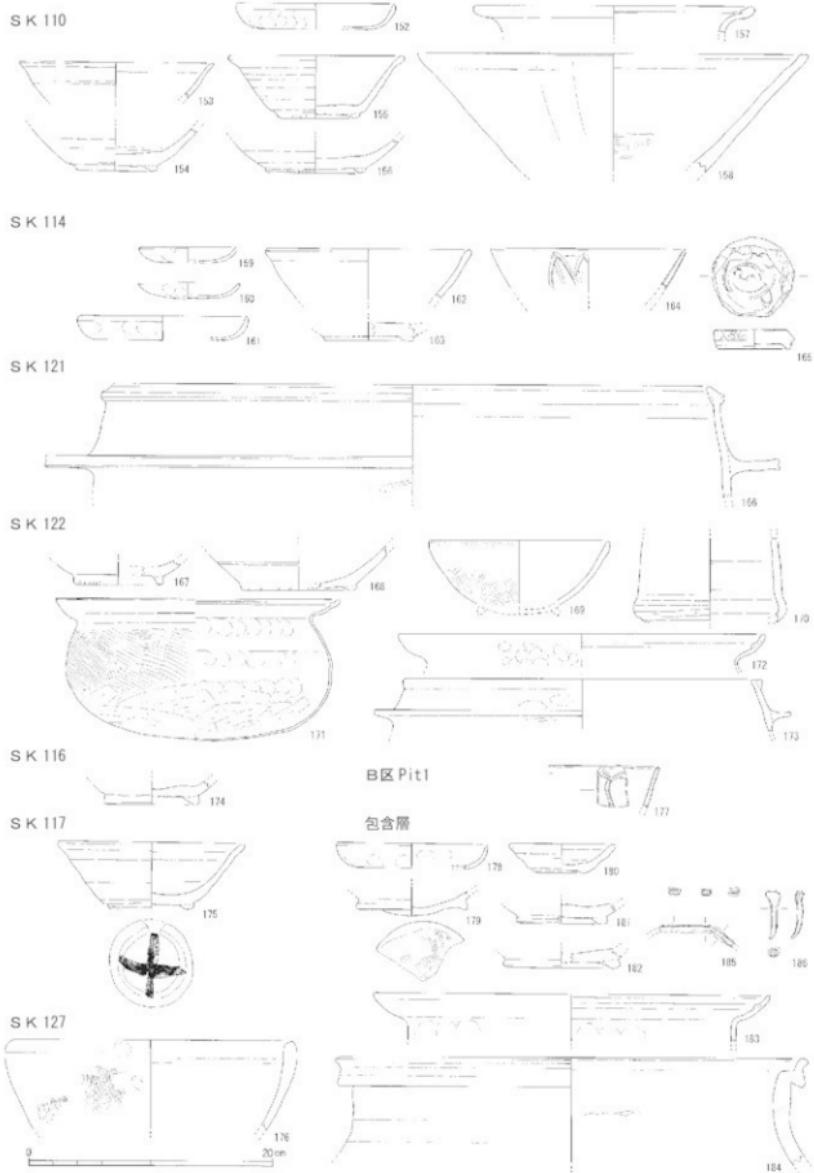
SK 126



第25図 SD 101上層・SD 1・SK 113・SK 126・A区H 6 Pit 4出土遺物実測図 (1:4)



第26図 SD 102・SD 103・SK 107・SK 112・SK 115・SK 104・SK 111出土遺物実測図 (1:4)



第27図 SK 110・SK 114・SK 121・SK 122・SK 116・SK 117・SK 127・B区 Pit1・包含層出土遺物 (1:4)

第2表 遺物観察表(1)

報告	実測番号	標印	小地区	遺物	種類	形状	計測値(cm)	測定・技術の特徴	出土	地成	色調	保存状	備考
1	R33-03	A	B12～E13	SD101 上層	弥生土器	壺	—	内:ナダ 内:直筒のうきガキ	やや粗	良	外:壁196.9 内:底2.3186.9	口縁片の 縁端部に沈縫が1条の み	□
2	R33-06	A	B12～E13	SD101 最下層	弥生土器	壺	—	内:ナダ→點付け突起→次縫文 内:ナダ	やや粗	良	内:点々赤褐色SYR5/4	体裏片の み	點付赤帯が2条、沈縫が2 条のぐる
3	R37-05	C	—	包含層	弥生土器	壺	縦径最大径 15.2	内:摩拭・ハラ拭き沈縫文 内:摩拭	やや粗 内:1mm 以下の中筋 多く含む	良	黄灰2. SYR1	細部	半斎竹管状工具による沈 縫が認めぐる
4	R34-01	A	B12～E13	SD101 上層	弥生土器	壺	体徑径36.9	内:ナダ→こガキテ→沈縫文 内:ナダ→こガキテ→モガキテ	やや粗	良	内:点々・黃褐色10196/3 内:底2. SYT7.6	体裏片の み	手造竹管による沈縫が1 条のぐる
5	R35-01	A	C5	包含層	弥生土器	壺	体徑径47.6	内:ナダ→こガキテ→モガキテ 内:摩拭・突起文 内:ナダ→オナニ	やや粗	良	内:点々・黒褐色7. SYR5/4 内:底2. SYT7. SYR7/4	漆器	漆器にかけて山形 文、沈縫・安帶文が認めぐ る。
6	R38-03	C	—	包含層	弥生土器	壺	直徑7.3	内:ナダ→こガキテ 内:ナダ	やや粗 内:1mm 以下の中筋 多く含む	良	内:点々・黄褐色10196/2 内:底2. SYT7. SYR7/4	漆器	6/12
7	R34-04	A	B12～E13	SD101 中層	弥生土器	壺	直徑5.7	内:ナダ→こガキテ 内:1mmチグテオナニ	粗 内:1mmチグテオナニ	良	内:点々・赤褐色SYR5/4 内:底2. SYR6/3	漆器	漆器にかけて山形 文、沈縫・安帶文が認めぐ る。
8	R33-04	A	B12～E13	SD101 中層	弥生土器	壺	直徑8.0	内:ナダ	やや粗	良	内:点々・黒褐色SYR5/4 内:底2. SYT7. SYR7/4	漆器	全体的に摩滅している
9	R34-03	A	B12～E13	SD101 上層	弥生土器	壺	直徑10.0	内:ナダ→ハケヌ 内:ナダ	やや粗	良	内:点々・黄褐色10197/3 内:底2. SYR7. SYR7/4	漆器	3/12
10	R33-02	A	B12～E13	SD101 最下層	弥生土器	壺	口徑24.6	内:ナダ→ハケヌ 内:ナダ	やや粗	良	内:点々赤褐色SYR5/3	口縁部	1/12
11	R34-02	A	B12～E13	SD101 上層	弥生土器	壺	口徑28.2	内:ナダ→こガキテ→鏡目文・沈 縫文 内:ナダ→こガキテ	やや粗 内:1mm 以下の中筋 多く含む	良	内:点々・黒褐色7. SYR6/4	口縁部に板状工具によ る模様文、底部に半斎竹管 竹管による模様	
12	R34-05	A	I3	SK111	弥生土器	壺	口徑21.0	内:ナダ→刻目文 内:ナダ	やや粗	良	内:点々・黒褐色7. SYR6/4	口縁部に板状工具によ る模様文	
13	R33-05	A	B12～E13	SD101 中層	弥生土器	壺	口徑20.8	内:ナダ→刻目文・沈縫文 内:ナダ	やや粗	良	内:点々・黄褐色10194/2 内:点々・黒褐色7. SYR6/4	口縁部 1/12	口縁部に沈縫が1条、 底部に半斎竹管による沈 縫が4条のぐる
14	R33-01	A	B12～E13	SD101 中層	石製	円盤	残存長6.8 外輪幅6.9 内輪厚1.3	—	—	—	—	完形	右肩・底端部若 側面は使用時に摩滅する
15	R40-03	C	—	SK125	須恵器	环	口径12.0	内:回転ナダ 内:回転ナダ	やや粗 内:1mm 以下の中筋 多く含む	良	黄7. SYR5/1	口縁部	実測周囲の口径、 角度位置
16	R40-04	C	—	SK125	土師器	丸底鉢	口径13.0	内:オナゲ→コナダ 内:コロナダ	粗 内:1mm以下 の砂粒含む	良	内:壁SYR7/6 内:底2. SYR6/6	口縁部	口縁部に板状工具によ る模様文
17	R39-06	C	—	SK125	土師器	壺	口径20.0	内:ヨコナダ→オナダ→ハゲヌ 内:ヨコナダ→ハラハラ	やや粗	良	内:点々・黄褐色10199/2 内:点々・黒褐色10197/3	口縁部 1~2/12	外面に模様文
18	R40-02	C	—	SK125	土師器	壺	口径26.0	内:ヨコナダ→ハゲヌ→オサニ 内:ヨコナダ→ハゲヌ→オサニ	やや粗	良	浅黄褐色10198/3	口縁部 1~2/12	
19	R16-02	A	D12	SD101 最下層	土師器	环	口径16.0	内:ヨコナダ→ヨコミガキ 内:ヨコナダ→ツタガキ	やや粗	良	相SYR	口縁部 1/12木柵	流域出土
20	R16-04	A	D13	SD101 最下層	土師器	环	口径18.0	内:ヨコナダ→オナダ	良	内:底2. SYR4/2 内:SYR7/6	口縁部 1~2/12	外面部に接着する 東洋テラス出土	
21	R15-07	A	D12	SD101 最下層	土師器	环	口径18.6	内:ナダ→ハケヌ→こガキ 内:ナダ→こガキ→こガキ	粗	良	相SYR7/6	口縁部 1/12木柵	
22	R15-05	A	D12	SD101 最下層	土師器	环	口径12.0	内:ヨコナダ 内:ヨコナダ→ナダ	粗 内:1mm 以下の中筋 少し含む	良	外: 黄褐色7. SYR7/6 内: 黄褐色7. SYR7/8	口縁部 1/12	
23	R16-01	A	D12	SD101 最下層	土師器	环	口径10.0	内:ヨコナダ→オナダ 内:ヨコナダ	やや粗	良	内: 黄褐色7. SYR8/4	口縁部 2~3/12	石縫裏込め出土
24	R15-02	A	D12	SD101 最下層	土師器	环	口径4.7	内:ヨコナダ→オナダ 内:ヨコナダ	やや粗 内:1mm 以下の中筋 含む	良	内: 黄褐色7. SYR8/4	口縁部 1~2/12	石縫裏込め出土
25	R15-04	A	D12	SD101 最下層	土師器	环	口径12.0	内:ヨコナダ→オナダ 内:ヨコナダ	やや粗	良	内: 黄褐色10198/4	口縁部 2/12	石縫裏込め出土
26	R15-06	A	D12	SD101 最下層	土師器	环	—	内:ヨコナダ 内:ヨコナダ→ナダ	やや粗	良	内: 黄褐色10198/3 内: 黄褐色10198/6	坏部のみ 石縫裏込め出土	/*記号「*」 石縫裏込め出土
27	R16-03	A	D12	SD101 最下層	土師器	瓶	—	内:ナダ→オニユーハケヌ 内:ヨコナダ→ハケヌ	やや粗	良	内: 黄褐色7. SYR8/3 内: 残10198/2	口縁部 1/12木柵	漏路出土
28	R16-05	A	D13	SD101 最下層	土師器	甕	口径18.0	内:ナダ→ハケヌ 内:ナダ→ハケヌ	やや粗 内:1mm 以下の中筋 含む	良	内:点々・黄褐色10197/2	口縁部 1/12	東洋テラス石室に出土
29	R15-03	A	C12	SD101 最下層	土師器	甕	口径14.0	内:ナダ→オニユーハケヌ 内:ヨコナダ→オナダ	やや粗 内:1mm 以下の中筋 少し含む	良	内: 黄褐色10198/3 内: 黄褐色10198/6	口縁部 1~2/12	石縫裏込め出土
30	R15-01	A	C12	SD101 最下層	土師器	甕	口径23.6	内:ナダ→ハケヌ 内:ヨコナダ→ハケヌ	やや粗	良	内: 黄褐色7. SYR8/3	口縁部 1/12木柵	
31	R30-05	A	B12～E13	SD101 最下層	須恵器	蓋	口径9.3	内:ヨコナダ→ハラクリマツ 内:ヨコナダ→ハラクリマツ 内:ヨコナダ	粗 内:1mm 以下の中筋 含む	良	内: HSYR. 1. 黄 内: HSYR. 1. 黄 内: HSYR. 1.	口縁部 1/12	は延定形 石数点出土
32	R30-04	A	B12～E13	SD101 最下層	須恵器	环身	口径10.4 内:底3.5	内:回転ナダ 内:回転ナダ	良	内: 底SYR1. 黄 内: 底SYR1. 黄 内: 底SYR1.	口縁部 1/12木柵	北側断面切り出上 外面部に模様付着	

第3表 遺物観察表（2）

報告	実測番号	場所	小地区	遺物	種・属	基盤	計測値(cm)	調査・採取の特徴	出土	地成	色調	保存状	備考
33	R18-03	A	B12～E13	SD101 最下層	石製品	巖石	長辺15.6 幅辺6.3 厚24.4	—	—	—	—	一部欠損	刷毛机あり。 手は磨いた後削れる。
34	R24-07	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径13.0 底径3.1 高さ4.6	内:ヨコナゾ→オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ	やや密 中空(1mm以下) 内部含む	やや不直	内:灰×黄褐色10YR7/3	口縁部 13/12	
35	R27-05	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径16.8	内:ヨコナゾ→ミガキ 外:ヨコナゾ→暗え	やや密	良	7.5YR7/6	口縁部 性・細か	外部内面に暗文
36	R23-04	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径17.1 底径3.8 高さ6.9	内:ヨコナゾ→オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ	良	橙紅色8/6	良	橙紅色8/6	外面部に環付着
37	R28-02	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径18.0 底径3.5	内:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ	密	良	内:5YR7/6 内:5YR7/6, 浅黃褐色 10YR7/3	口縁部 1/12未満	
38	R28-01	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径19.5 底径3.0	内:ヨコナゾ→ミガキ 外:ヨコナゾ→ミガキ	密	良	橙紅色8/6	口縁部 1/12未満	
39	R25-01	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径17.2 底径4.3	内:ヨコナゾ→ケズリ 外:ヨコナゾ→工芸ナゾ	中空(1.5mm 以下)の細孔 内部含む	良	7.5YR7/6	口縁部 9/12	
40	R30-01	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径11.6 底径4.1	内:ヨコナゾ→压痕 外:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ	密	良	内:灰×黄褐色7.5YR7/6 内:灰×黄褐色7.5YR7/4	口縁部 7/12	
41	R30-02	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径11.6 底径4.0	内:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ	密	良	内:灰×黄褐色7.5YR7/6 内:灰×黄褐色7.5YR7/3	口縁部 11/12	
42	R24-05	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径12.0 底径3.45 高さ4.5	内:ヨコナゾ→オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ	中空(1.5mm 以下)の細孔 内部含む	良	内:灰×黄褐色10YR7/4	口縁部 5/12	
43	R29-01	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径14.0	内:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ	被(微細粒 物質含む)	良	内:灰×黄褐色7.5YR7/3 内:灰×黄褐色7.5YR7/2	口縁部 1/12	
44	R24-01	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径14.0 底径4.1 高さ6.8	内:ヨコナゾ→オサエ→ハケメ 外:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ	中空(1.5mm 以下)の細孔 内部含む	良	内:灰×黄褐色7.5YR7/4	口縁部 1/12	体部外側にモガワ丘窓
45	R29-02	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径15.0 底径4.5	内:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ	良	内:灰×黄褐色10YR8/3	口縁部 5/12		
46	R26-03	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径9.6 底径3.0	内:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 6/12		
47	R28-05	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径10.8 底径3.3	内:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ	やや密 被(微細粒 物質含む)	良	内:灰×黄褐色10YR8/3	口縁部 6/12	底部にハラ記号「×」?
48	R26-04	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	口径10.0 底径3.4	内:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ	やや密	内:灰×黄褐色10YR8/3	口縁部 4/12		
49	R28-04	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	环	—	内:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ・オサエ	被(Geissell の砂粒含む)	良	内:灰×黄褐色10YR8/3	底部 4/12	底部にハラ記号「×」?
50	R31-03	A	B12～E13	SD101 下層	須恵器	环身	口径9.4	内:回転ナゾ 外:回転ナゾ	被(Geissell の砂粒含む)	良	灰黄2.5YR7/6	口縁部 3/12上	底部にハラ記号「×」?
51	R24-02	A	B12～E13	SD101 下層	須恵器	环身	口径23.4	内:回転ナゾ、底部へフリリ 調節 外:回転ナゾ	中空(1cm 以下)の細孔 内部含む	不良	灰白2.5YR7/2	口縁部 3/12	
52	R18-02	A	B12～E13	SD101 下層	須恵器	壺	口径8.8	内:回転ナゾ 外:回転ナゾ	中空(1cm 以下)の細孔 内部含む	良	灰白8/2	口縁部 4/12	外側に自然抽付着
53	R24-03	A	B12～E13	SD101 下層	須恵器	平底	口径11.5	内:回転ナゾ 外:回転ナゾ	良	灰黄2.5YR7/6	口縁部 2/12	外側とともに自然抽付着、 側面外側に疣状が 集まる。	
54	R24-04	A	B12～E13	SD101 下層	須恵器	高环 (脚部)	口径11.6	内:回転ナゾ 外:回転ナゾ	被(微細粒 物質含む)	良	内:灰黄10YR5/1 内:灰黄10YR4/1	脚部 3/12	内面に灰が付る。
55	R31-04	A	B12～E13	SD101 下層	須恵器	壺	口径18.4	内:回転ナゾ→平行タッカ→オ サエ 外:回転ナゾ	中空(1cm 以下)の細孔 内部含む	良	灰白2.5YR7/1	底部 4/12	
56	R29-04	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	甕	口径18.0	内:ヨコナゾ→ハケメ 外:ヨコナゾ→ハケメ→メクリ ナゾ・オサエ	やや密 被(微細粒 物質含む)	良	内:5YR7/6	口縁部 5/12	
57	R23-03	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	甕	口径9.6	内:ヨコナゾ→オサエ 外:ヨコナゾ	中空(1cm 以下)の細孔 内部含む	不良	内:灰×黄褐色10YR7/4	口縁部 2/12	
58	R27-02	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	甕	口径18.0	内:ヨコナゾ→ハケメ 外:ヨコナゾ	やや密	内:灰×黄褐色7.5YR8/3	口縁部 2/12		
59	R27-03	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	甕	口径22.3	内:ヨコナゾ→ハケメ 外:ヨコナゾ→工芸ナゾ	中空(1cm 以下)の細孔 内部含む	良	内:灰×黄褐色10YR8/3	口縁部 1/12強	
60	R29-03	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	甕	口径12.0	内:ヨコナゾ→ハケメ 外:ヨコナゾ→ハケメ→ナゾ ナゾ・オサエ	やや密 被(微細粒 物質含む)	良	内:灰×黄褐色10YR7/3 内:灰×灰×黄褐色10YR7/3 L.5/12	口縁部 5/12	
61	R18-01	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	甕	口径14.0	内:ヨコナゾ 外:ヨコナゾ	やや密	内:灰×黄褐色10YR8/3	口縁部 1/12未満		
62	R24-06	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	甕	口径17.0	内:ヨコナゾ→オサエ→工具 外:ヨコナゾ→ハケメ	中空(1.5cm 以下)の細孔 内部含む	不良	内:灰×黄褐色10YR8/3	口縁部 1/12未満	
63	R16-06	A	D12	SD101 下層	土器器	甕	口径16.4	内:ナゾ→オサエ→ハケメ 外:ナゾ→ハケメ	やや密 被(微細粒 物質含む)	不良	灰白10YR8/2	口縁部 3~4/12	
64	R25-02	A	B12～E13	SD101 下層	土器器	甕	口径15.0	内:ヨコナゾ→オサエ 外:ヨコナゾ→ナゾ→モガワ 風	中空(1.5cm 以下)の細孔 内部含む	不良	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	

第4表 遺物観察表(3)

報告	実測番号	地名	小地区	遺物	種類	基準	計測値(cm)	測定・技術の特徴	出土	地城	色調	保存状	備考
65	R27-01	A	B12～E13	SD101	土器部	把手付鉢	口径31.4	馬・ヨコナダーハケメ 内:ヨコナダーナデ・オサエー 外:ヨコナダーナデ	やや密 真	にぶい・櫻7.5/87/3	口縁部 2/12		
66	R23-02	A	B12～E13	SD101	下層	土器部	把手付鉢	口径34.0	馬・ヨコナダーナデ・オサエー 内:ヨコナダーナデ	やや密 真	黄褐色10YR8/3	口縁部 1/12未満	内面のハケメは外面の形 体より細かい
67	R26-01	A	B12～E13	SD101	下層	土器部	把手付鉢	口径38.0	馬・ナダーハケメ→ヨコナダーハケメ 内:ナダーハケメ→ヨコナダーハケメ 外:ナダーハケメ→ヨコナダーハケメ	やや密 真	灰白10YR8/2	口縁部 1/12未満	
68	R23-01	A	B12～E13	SD101	下層	土器部	把手付鉢	口径42.1	馬・ヨコナダーナデ・オサエー 内:ヨコナダーナデ・オサエー	やや密 真	にぶい・櫻7.5/87/3	口縁部 1/12未満	
69	R17-01	A	B12～E13	SD101	下層	土器部	瓶	口径30.8	馬・ナダーハケメ 内:ナダーハケメ→ヨコナダーハケメ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	にぶい・櫻7.5/87/4	口縁部 1/12未満	
70	R26-02	A	B12～E13	SD101	下層	土器部	瓶	口径20.0	馬・ヨコナダーハケメ 内:ヨコナダーハケメ	やや密 真	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
71	R25-03	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	环	口径14.0	馬・ヨコナダーナデ 内:ヨコナダーナデ	やや密 真	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	口縁部 2/12	
72	R20-02	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	环	口径14.8	馬・ヨコナダーナデ・オサエー 内:ヨコナダーナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	西黃褐色7.5YR8/4	口縁部 2～3/12	
73	R21-03	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	环	口径21.2	馬・ヨコナダーナデ 内:ヨコナダーナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	内:褐7.5/87/6 外:褐7.5/87/4, 8 現7.5/86/2	口縁部 1～2/12	
74	R25-05	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	瓶少・鍋	—	馬・翠葉 内:翠葉	中空1.5mm 以下の砂粒 含む	不負 桜7.5/87/6	把手のみ	翠葉美しい
75	R21-02	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	瓶少・鍋	—	馬・ナダ 内:ナダ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	西黃褐色7.5YR8/4	把手のみ	
76	R21-01	A	B12～E13	SD101	(山系60)	陶器	輪	口径16.0	馬・回転ナデ 内:回転ナデ	現	灰白9YR7/1	口縁部 1/12	麗美産
77	R25-04	A	B12～E13	SD101	(山系60)	陶器	輪	口径15.0	馬・回転ナデ 内:回転ナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	灰白9YR7/1	口縁部 1/12	麗美産
78	R20-01	A	B12～E13	SD101	(山系60)	陶器	高台律8.0	馬・回転ナデ, 底部糸切り→馬 内:回転ナデ, 糸切り→馬	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	外:灰黒2.5/86/2 内:灰黒2.5/87/3	高台部 2/12	麗美産 内に自然釉付着	
79	R19-01	A	B12～E13	SD101	(山系60)	陶器	高台律8.1	馬・回転ナデ, 底部糸切り→馬 内:回転ナデ, 糸切り→馬	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	灰黄2.5YR7/2	高台部 9/12	知多・豊後窯 内に自然釉付着	
80	R30-03	A	B12～E13	SD101	(山系60)	陶器	底径8.6	馬・回転ナデ, 底部糸切り→馬 内:回転ナデ, 糸切り→馬	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	灰暗黄2.5YR7/2	底部 9/12	知多・豊後窯	
81	R19-06	A	B12～E13	SD101	(山系60)	陶器	高台律8.6	馬・回転ナデ, 底部糸切り→馬 内:回転ナデ, 糸切り→馬	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	外:灰黒2.5/87/2 内:灰黒2.5/87/2	高台部 2/12	知多・豊後窯	
82	R20-07	A	B12～E13	SD101	(山系60)	陶器	高台律9.1	馬・回転ナデ, 底部糸切り→馬 内:回転ナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	灰黄2.5YR7/2	高台部 3/12左	知多・豊後窯	
83	R31-02	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	甕	口径18.2	馬・ヨコナダーナデ・オサエー 内:ヨコナダーナデ・オサエー	やや密 真	灰黄2.5YR7/2, 黑 10YR8/6	口縁部 1/12左下	
84	R30-06	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	甕	口径17.6	馬・ヨコナダーナデ・オサエー 内:ヨコナダーナデ・オサエー	やや密 真	灰黄2.5YR7/2, 黑 10YR8/6	口縁部 1/12左上	
85	R19-02	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	甕	口径19.0	馬・ヨコナダーナデ 内:ヨコナダーナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	外:灰2.5/87/3 内:灰2.5/87/3, 黑 10YR8/3	口縁部 1/12	外に焼付着
86	R20-04	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	甕	口径18.0	馬・ヨコナダーナデ 内:ヨコナダーナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	外:灰2.5/87/3 内:灰2.5/87/3, 黑 10YR8/4/2	口縁部 1/12	体部内面に炭化物付着
87	R31-01	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	甕	口径17.8	馬・ヨコナダーナデ 内:ヨコナダーナデ	やや密 真	不負 内:灰黄2.5YR7/2	口縁部 2/12	
88	R20-05	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	甕	口径18.0	馬・ヨコナダーナデ 内:ヨコナダーナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	外:灰2.5/87/3 内:灰2.5/87/3, 黑 10YR8/3	口縁部 2/12	体部内面に炭化物付着
89	R20-06	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	甕	口径18.0	馬・ヨコナダーナデ 内:ヨコナダーナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	
90	R10-01	A	B12～E13	SD101	上層	土器部	甕	口径20.2	馬・ナダーナデ・ヨコナダーナデ 内:ナダーナデ・ヨコナダーナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	外:灰2.5/87/3 内:灰2.5/87/3, 黑 10YR8/4/2	口縁部 6/12	
91	R32-04	A	B12～E13	SD101	上層	ロクロ土器部	甕	底径6.6	外:回転ナデ・底部糸切り→馬 内:回転ナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	灰白2.5YR7/2	底部 3/12	
92	R19-05	A	B12～E13	SD101	上層	ロクロ土器部	甕	高台律7.6	外:回転ナデ・底部糸切り→馬 内:回転ナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	外:灰2.5/87/2 内:灰2.5/87/2, 黑 10YR8/3	高台部 11/12	
93	R32-02	A	B12～E13	SD101	上層	ロクロ土器部	甕	底径6.8	外:回転ナデ・底部糸切り→馬 内:回転ナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	灰白2.5YR7/2	底部 7/12	
94	R32-01	A	B12～E13	SD101	上層	ロクロ土器部	甕	底径7.2	外:回転ナデ・底部糸切り→馬 内:回転ナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	外:灰黄2.5/88/4 内:灰黄2.5/88/3	底部 9/12	
95	R32-03	A	B12～E13	SD101	上層	ロクロ土器部	甕	底径6.8	外:回転ナデ・底部糸切り→馬 内:回転ナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	灰2.5/87/4	底部 3/12左下	
96	R20-03	A	B12～E13	SD101	上層	ロクロ土器部	甕	高台律8.8	外:回転ナデ・底部糸切り→馬 内:回転ナデ	現Oval2.7 の小口・砂 粒含む	灰2.5/87/6	高台部 3/12	

第5表 遺物観察表（4）

件名	実測番号	地名	小地区	遺種	種・変	基種	計測値(cm)	測定・技術的特徴	紹介	施設	色調	堆存度	備考	
97	R19-04	A	B12～E13	SD101	ロクロ土器群	陶	高台径6.8	外:回転ナード、底部赤切り一層 内:回転ナード	底(0.3cm以下) の砂粒少 含む)	不食	灰白2.5Y8/2 内:灰2.5Y8/2	高台部 3/12堆		
98	R28-03	A	B12～E13	SD101	上層	ロクロ土器群	陶	直径7.0	外:回転ナード、底部赤切り一層 内:回転ナード	底(0.3cm以下) の砂粒少 含む)	食	灰白2.5Y8/2	底面 6/12	
99	R19-03	A	B12～E13	SD101	上層	ロクロ土器群	陶	高台径6.8	外:回転ナード、底部赤切り一層 内:回転ナード	底(0.3cm以下) の砂粒少 含む)	不食	灰白2.5Y8/1	高台部 1/12	摩滅らしい
100	R32-05	A	B12～E13	SD101	上層	ロクロ土器群	陶	直径8.6	外:回転ナード、底部赤切り一層 内:回転ナード	底(0.3cm以下) の砂粒少 含む)	やや食	灰白2.5Y8/1	底面 3/13	
101	R21-04	A	D12	SD101	上層	土師質	土師	直径4.9 高さ6.5	外:ナード	底(0.3cm以 下の砂粒少 含む)	底(0.3cm以 下の砂粒少 含む)	灰白2.5Y8/4 内:灰2.5Y8/4 内:灰2.5Y8/4	完形	直量: 6.0kg
102	R16-01	H8立会	-	SD1	陶器 (山茶瓶)	小柄	口径4.3 高台径5.0	外:回転ナード、底部赤切り一層 内:回転ナード	底(0.3cm以 下の砂粒少 含む)	食	灰白2.5Y7/2	高台部 10/12	深灰色 H8立会調査出土	
103	R16-02	H8立会	-	SD1	陶器 (山茶瓶)	陶	高台径6.8	外:回転ナード、底部赤切り一層 内:回転ナード	底(0.3cm以 下の砂粒少 含む)	食	灰白2.5Y7/2	高台部 2/12	深灰色 H8立会調査出土	
104	R07-04	A	B6	Pit4	須恵器	蓋	口径4.9 高さ4.4	外:回転ナード、回転ケヅリ 内:ナード	底(0.3cm以 下の砂粒少 含む)	食	灰白2.5Y8/1 内:灰2.5Y8/1	口縁部 8/12	外面に擦が付着?	
105	R14-03	A	B6	Pit4	須恵器	环	口径11.0 高さ3.3 底径6.0	外:回転ナード、底部赤フロコし 内:回転ナード	底(0.3cm以 下の砂粒少 含む)	食	绿灰3G5/1	口縁部 2/12 底面6/12		
106	R14-04	A	B6	Pit4	土師器	瓶	口径24.6	外:ナード→ハケメ 内:ナード→ハケメ	底(0.3cm以 下の砂粒少 含む)	食	外:灰4.5黄褐色10Y8/4 内:一部灰4.5黄褐色10Y8/2	口縁部 1/12堆満		
107	R02-07	A	I3	SK113	土師器	环	口径18.0	外:ナード→ミガキ 内:ミガキ	底	食	外:灰4.5黄褐色10Y8/4 内:灰4.5黄褐色10Y8/2	口縁部 1/12堆満		
108	R40-06	C	-	SK126	土師器	陶	口径14.8	外:ヨコナード→ミガキ 内:ミガキ	底	食	灰5G9/6	口縁部 1/12堆満	内面に擦文あり	
109	R12-02	A	E14	SD102	土師器	小皿	口径7.2 高さ1.3	外:ナード→オサエ 内:ナード	やや食(金 雲母・砂 粒多く含む)	食	外:灰白2.5Y8/2 内:浅黄色10Y8/3	口縁部 11/12		
110	R12-03	A	E14	SD102	土師器	皿	口径12.2	外:ナード→オサエ 内:ナード	やや食(金 雲母・砂 粒多く含む)	食	外:黄褐色10Y8/3	口縁部 1/12堆		
111	R12-05	A	E14	SD102	土師器	皿	口径14.0	外:ナード→オサエ 内:ナード	やや食(金 雲母・砂 粒多く含む)	食	外:黄褐色10Y8/3	口縁部 2/12堆		
112	R12-04	A	B14～E14	SD102	陶器	壺	直径12.1	外:ナード→オサエ 内:ナード	底(0.3cm以 下の砂粒少 含む)	食	外:灰7.5Y8/2 内:灰白2.5Y7/1	底面 2/12	深灰色	
113	R11-01	A	B14～E14	SD102	土師器	羽釜	口径35.8	外:ナード→オサエ 内:ナード	やや食(小 さな砂粒 多く含む)	食	灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12堆		
114	R12-01	A	B14～E14	SD102	土師器	羽釜	体深径35.0	外:ナード 内:ナード	やや食	食	黄褐色10Y8/3	口縁部 1/12		
115	R11-02	A	B14～E14	SD102	土師器	鍋	口径30.2	外:ナード 内:ナード	やや食(小 さな砂粒 多く含む)	食	灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12堆		
116	R11-04	A	E14	SD102	土師器	鍋	口径33.2	外:ナード→オサエ 内:ナード	半平底(金 雲母・砂 粒含む)	食	外:灰白2.5Y8/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 1/12	外に煤付着	
117	R11-03	A	B14～E14	SD102	土師器	鍋	口径33.2	外:ナード→オサエ 内:ナード	半平底(金 雲母・砂 粒含む)	食	外:灰白2.5Y8/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 1/12	外に煤付着	
118	R13-04	A	B11～E11	SD103	土師器	皿	口径12.0	外:ナード→オサエ 内:ナード	やや食	食	外:灰白2.5Y8/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12		
119	R13-01	A	B11～E11	SD103	土師器	皿	口径13.0	外:ナード 内:ナード	やや食	食	外:灰白2.5Y8/2 内:灰白2.5Y8/2	口縁部 1/12		
120	R12-06	A	B11～E11	SD103	土師器	鍋	口径28.4	外:ヨコナード→ハケメ 内:ナード→具ナード	やや食	食	外:灰10Y8/2-1/1 内:灰4.5黄褐色10Y8/3	口縁部 2/12		
121	R09-05	A	B11～E11	SD103	土師器	香炉	直径7.4	外:ナード→ケヅリ 内:ナード→ミガキ	底(0.3cm以 下の砂粒 多く含む)	食	外:灰4.5黄褐色10Y8/4	底面 12/12	陶器香炉の標識か	
122	R13-03	A	B11～E11	SD103	ロクロ土器群	小皿	直径2.1	外:回転ナード、底部赤切り後 内:回転ナード	底(0.3cm以 下の砂粒 多く含む)	食	黄褐色10Y8/3	底面のみ		
123	R13-02	A	B11～E11	SD103	陶器 (山茶瓶)	陶	高台径4.0	外:回転ナード、高台貼付け後 内:回転ナード	底(0.3cm以 下の砂粒 多く含む)	食	灰白10Y8/1	底面 10/12	深灰色	
124	R13-05	A	B11～E11	SD103	陶器 (山茶瓶)	陶	高台径6.3	外:回転ナード、セミグラフ 内:セミグラフ	底(0.3cm以 下の砂粒 多く含む)	やや食	外:10Y8/1	高台部 7/12	多・豪華	
125	R14-02	A	B11～E11	SD103	陶器 (山茶瓶)	小柄	口径11.4	外:回転ナード、底部赤切り一層 内:回転ナード	底(0.3cm以 下の砂粒 多く含む)	食	灰白2.5Y7/2	口縁部 2/13	深灰色 内面に自然釉付着	
126	R14-01	A	B11～E11	SD103	陶器 (山茶瓶)	陶	口径16.0	外:ヨコナード 内:回転ナード	底(0.3cm以 下の砂粒 多く含む)	食	灰4.5Y8/1 内:灰2.5Y6/1 内:灰2.5Y6/1	口縁部 1/12	深灰色 内面に煤付着	
127	R13-07	A	B11～E11	SD103	陶器 (山茶瓶)	陶	高台径6.9	外:回転ナード、底部赤切り一層 内:回転ナード	底(0.3cm以 下の砂粒 多く含む)	食	外:灰2.5Y7/2 内:灰4.5黄褐色10Y8/2	口縁部 1/12堆	深灰色 内面に自然釉付着	
128	R09-04	A	B11～E11	SD103	陶器 (山茶瓶)	陶	高台径6.4	外:回転ナード 内:回転ナード	底	食	灰白2.5Y6/2	底面 2/12	深灰色	

第6表 遺物観察表(5)

所蔵	実物番号	年代	小地区	遺構	種・質	部場	計測部(m)	測量・記述の特徴	出土	地城	色調	堆存層	備考
129	R13-08	A	B11～E11	SD103 (山茶園)	陶器	楕	高台径6.0	内・凹輪ナジ、高台貼付け接着ナジ 内・内輪ナジ	小矢束(手) 楕合口付 食	灰白2.5 Y7/1	高台部	圓美產 4/12 内面に自然輪付着	
130	R13-06	A	B11～E11	SD103 (山茶園)	陶器	楕	高台径5.0	内・凹輪ナジ、高台貼付け接着ナジ 内・内輪ナジ	網(小さい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	灰 灰白2.5 Y7/1	高台部	圓美產 2/12 内面に自然輪付着	
131	R04-01	A	G7	SK107	土師器	小皿	口径7.7 高さ0.9	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	灰白2.5 Y7/1	口縁部	
132	R04-05	A	G7	SK107	土師器	小皿	口径7.6 高さ1.2	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	灰白2.0 Y8R/2	口縁部	ほぼ完形
133	R04-07	A	G7	SK107	土師器	小皿	口径7.6 高さ1.25	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	灰白2.0 Y8R/2	口縁部	ほぼ完形
134	R04-08	A	G7	SK107	土師器	小皿	口径7.8 高さ1.25	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	淡黃褐色10Y8R/2	口縁部	4/12
135	R04-06	A	G7	SK107	土師器	小皿	口径7.9 高さ1.2	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	灰白2.0 Y8R/2	口縁部	ほぼ完形
136	R04-03	A	G7	SK107	土師器	小皿	口径8.0 高さ0.9	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	淡黃褐色10Y8R/2	口縁部	11/12
137	R04-02	A	G7	SK107	土師器	皿	口径11.8 高さ2.1	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	灰白2.0 Y8R/2	口縁部	6/12
138	R04-04	A	G7	SK107	土師器	皿	口径11.8 高さ2.6	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	灰白2.0 Y8R/2	口縁部	11/12
139	R05-01	A	G7	SK107	土師器	鍋	口径21.1 高さ11.7	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	灰白2.0 Y8R/2	口縁部	12/12
140	R06-01	A	G7	SK107	土師器	鍋	口径22.4 高さ12.2	内・ナジ→オサエ→ハケ 内・ナジ→オサエ→ハケ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	内・淡黄褐色2.5Y8R/3 内・淡黄褐色2.5Y8R/3	口縁部	体外外縁に保付費(上)と體外外縁に保付費(下)とあり。内面に使用痕の付着跡あり。
141	R06-04	A	G7	SK112	土師器	小皿	口径8.0 高さ1.1	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	内・淡黄褐色10Y8R/3	口縁部	9/12
142	R06-03	A	G7	SK112	土師器	小皿	口径7.7 高さ1.8	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	淡黃褐色10Y8R/3	口縁部	5/12
143	R36-03	A	G7	SK112	鐵製品	腰刀	長さ32.6 幅3.8	—	—	—	—	一概欠損	刀身3.0、某厚0.5 刀柄0.8
144	R06-05	A	B6	SK115	土師器	小皿	口径7.6 高さ0.9	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	やや粗 やや粗	内・淡黄褐色2.5Y8R/3	口縁部	3/12	
145	R06-07	A	B6	SK115	土師器	小皿	口径10.0 高さ1.2	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	やや粗(手) やや粗(手)	内・淡黄褐色2.5Y8R/2	口縁部	完形	
146	R06-06	A	B6	SK115	土師器	皿	口径11.0 高さ2.5	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ→工具ナチュ	やや粗(手) やや粗(手)	内・淡黄褐色2.5Y8R/2	口縁部	6/12	
147	R07-03	A	B6	SD104 (山茶園)	陶器	楕	高台径6.8	内・凹輪ナジ、底面部切り落 内・内輪ナジ	網(細かい) 内・内輪ナジ	良	灰褐色10Y8R/1	底面部	圓美產 墨書「上上」?
148	R02-04	A	I3	SK111	土師器	小皿	口径8.0	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	淡黃褐色10Y8R/2	口縁部	1/12未満
149	R06-02	A	I3	SK111	土師器	小皿	口径7.6 高さ1.2	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	やや粗(手) やや粗(手)	内・淡黄褐色10Y8R/3	口縁部	9/12	
150	R02-05	A	I3	SK111	土師器	皿	口径11.7 高さ2.0	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	灰白2.0 Y8R/2	口縁部	2/12
151	R02-06	A	I3	SK111	陶器	楕	口径15.0	内・凹輪ナジ 内・内輪ナジ	やや粗(手) やや粗(手)	良	灰白2.0 Y8R/1	口縁部	1/12未満 知多・猿投產
152	R02-03	A	B6	SK110	土師器	皿	口径13.2 高さ2.1	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	良	内・淡黄褐色2.5Y8R/2 内・淡黄褐色10Y8R/3	口縁部	2/12	
153	R01-04	A	B6	SK110	陶器	楕	口径16.0	内・凹輪ナジ 内・内輪ナジ	良	灰白2.0 Y8R/1	口縁部	1/12未満 知多・猿投產	
154	R02-01	A	B6	SK110	陶器	楕	高台径6.6	内・凹輪ナジ、高台貼付け接着ナジ 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	灰白2.0 Y8R/1	高台部	圓美產
155	R02-02	A	B6	SK110	陶器	楕	口径14.0 高さ6.5	内・凹輪ナジ、高台貼付け接着ナジ 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	灰白2.0 Y8R/1	口縁部	1/12未満 内・外縁に保付着
156	R01-07	A	B6	SK110	陶器	楕	高台径6.2	内・凹輪ナジ、高台貼付け接着ナジ 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	やや粗(手) やや粗(手)	良	灰白2.0 Y8R/1	高台部	4/12
157	R01-02	A	B6	SK110	土師器	鍋	口径23.0	内・コロナジ→オサエ 内・コロナジ	網(細かい) 内・内輪ナジ 内・凹輪ナジ	良	淡黃褐色10Y8R/3	口縁部	1/12未満
158	R01-01	A	B6	SK110	陶器	鉢	口径32.0	内・凹輪ナジ 内・内輪ナジ→ハケメ	良	灰褐色2.5Y8R/2	口縁部	1/12	
159	R03-02	A	H3	SK114	土師器	小皿	口径8.0	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	良	淡黃褐色10Y8R/2	口縁部	1/12	
160	R03-01	A	H3	SK114	土師器	小皿	口径8.3	内・ナジ→オサエ 内・ナジ→オサエ	良	内・淡黄褐色10Y8R/3	口縁部	6/12	

第7表 遺物観察表（6）

順位	実測番号	地名	小地区	遺構	種・質	基盤	計測幅(㎝)	測量・技術的特徴	出土	施成	色調	堆存度	備考
161	R03-03	A	B3	SK114	土器師	瓦	口径14.0	外：ナガードオサエ 内：ナガードオサエ	新 基(10cm以下)の砂粒 含む)	良	灰白10YR8/2	口縁部 2~12	
162	R03-05	A	B3	SK114	陶器 (山本編)	輪	口径16.0~ 17.0	外：回転ナダ 内：回転ナダ	新	良	灰白10YR7/1	口縁部 1/12.裏	知多・織田窯
163	R03-06	A	B3	SK114	陶器 (山本編)	輪	高台径7.2	外：回転ナダ、底部赤切り→高 台付け棒ナダ 内：回転ナダ	やや新 (微細含 む)	良	灰白2.5Y7/1	高台部 6/12	綿美窯
164	R03-04	A	B3	SK114	青磁	輪	口径16.0	外：回転ナダ→施文→施輪 内：回転ナダ→施輪	新	良	素地：灰E32.5Y7/1 輪：灰オリーブ 5.5Y6/2	口縁部 1/12	
165	R03-07	A	B3	SK114	青磁	加工 凹盤	底径6.0	外：回転ナダ→施輪 内：回転ナダ→施輪	新	良	素地：灰E32.5Y7/1 輪：灰オリーブ 5.5Y6/2	底脚 12/13 ほば形	
166	R38-01	C	-	SD421	土器師	羽釜	口径48.0	外：ヨコナダ→ハケメ 内：ヨコナダ→ナダ	やや新 (10cm以 下丁の砂 粒含む)	良	灰白10YR8/1	口縁部 羽釜か	
167	R39-01	C	-	SD422	陶器 (山本編)	輪	底径7.4	外：回転ナダ、底部赤切り→高 台付け棒ナダ、モリガラ底 内：回転ナダ	新	良	灰E2.5Y7/2	底脚 1~2/12	綿美窯
168	R39-03	C	-	SD422	陶器 (山本編)	輪	底径9.4	外：回転ナダ 内：回転ナダ→施文→施輪	やや新 (10cm以 下丁の砂 粒含む)	中 心部 底	灰E2.5Y7/2 内：灰 10YR7/2	2~3/12	知多・織田窯
169	R39-02	C	-	SD422	土器師	輪	口径14.8	外：ナガード→ハケメ 内：ナガード	底面(歯 付)	良	外：E3.5V7.0Y8/3 内：灰黄 10YR8/3	口縁部 2~3/12	
170	R37-04	C	-	SD422	陶器	筒形容器	体部最大径 12.5	外：回転ナダ→施葉 内：回転ナダ	新	良	素地：灰E2.5Y7/1 輪：灰オリーブ 5.5Y6/2	底脚 4/12	古窯F窯
171	R37-01	C	-	SD422	土器師	輪	口径23.2	外：ヨコナダ→ハケメ→カズアリ 内：ヨコナダ→ナダ・オサエ	やや新 (10cm以 下丁の砂 粒含む)	良	内：灰 E3.5V7.0Y8/3	口縁部 9/12	
172	R39-05	C	-	SD422	土器師	輪	口径30.0	外：ヨコナダ→オサエ	新 の砂粒含 む)	良	外：黑10YR7/1 内：灰黄 10YR8/3	口縁部 1/12	
173	R41-01	C	-	SD422	土器師	輪	口径29.4	外：ヨコナダ→オサエ→ナダ 内：ヨコナダ	やや新 (10cm以 下丁の砂 粒含む)	良	灰黄 10YR8/3	口縁部 1/12.裏	
174	R07-02	A	G7	SK116	陶器 (山本編)	輪	高台径7.8	外：回転ナダ、底部赤切り→高 台付け棒ナダ 内：回転ナダ	新 (10cm以 下丁の砂 粒含む)	良	内：灰 E2.5Y7.0Y8/2	高台部 2/12	綿美窯。内面に漆付茎。 内面に薄く自然釉。
175	R07-01	A	F6	SK117	陶器 (山本編)	輪	口径15.3 器高6.4 底径7.1	外：回転ナダ、底部赤切り→高 台付け棒ナダ 内：ヨコナダ	新 (10cm以 下丁の砂 粒含む)	良	灰 10YR7/1 内：灰黄 10YR8/3	口縁部 4/12	綿美窯 器身「十」
176	R40-01	C	-	SK127	土器師	鉢	口径24.0	外：ヨコナダ→ハケメ・オサエ 内：ヨコナダ	新	良	内：灰 E3.5V7.0Y8/3	口縁部 1~2/12	
177	R21-05	B	-	Pt1 上層	青磁	輪	-	外：回転ナダ→施文→施輪 内：回転ナダ→施輪	新	良	素地：灰白10YR7/1 輪：明褐色L.GY7/1	1/12以下	
178	R01-06	A	C付近	包含層	土器師	瓦	口径12.3	外：ナガード→オサエ 内：ナガード→オサエ	新	良	浅黄 10YR8/3	口縁部 1/12強	
179	R37-03	C	-	包含層	土器師	輪	定径8.8	外：ナガード→ハメ→高台付け 内：ナダ	新	良	内：灰 E2.5Y7.0Y8/3	底脚 4/12	
180	R01-05	A	C付近	包含層	陶器 (山本編)	瓦	口径8.7 器高3.4 底径8.8	外：回転ナダ 内：回転ナダ、高台付け 内：ナダ	新 (微細含 む)	良	灰E2.5Y8/1	口縁部 1/12	綿美窯
181	R09-02	A	B15	包含層	陶器 (山本編)	輪	高台径6.4	外：回転ナダ、底部赤切り→高 台付け棒ナダ 内：回転ナダ	新	良	灰白2.5Y7/1	底脚 6/12	綿美窯
182	R09-03	A	B15	包含層	陶器 (山本編)	輪	高台径	外：回転ナダ、底部赤切り→高 台付け棒ナダ 内：回転ナダ	新	良	灰E2.5Y7/1 (高台・底脚 10cm)	底脚 4/12	綿美窯。高台と体部の素 地(胎土)が異なる。
183	R08-01	A	-	包含層	土器師	輪	口径32.4	外：ヨコナダ→オサエ 内：ヨコナダ→オサエ	新	良	外：灰 10YR8/2 内：灰 E3.5V7.0Y8/3	口縁部 1/12	
184	R08-02	A	A15	包含層	陶器	甕	口径38.0	内：回転ナダ 外：回転ナダ	新	良	暗赤褐色 5.5E2.5Y2/3(施葉) 輪：E2.5V4.3(自然釉) 10cm	口縁部 1/12以下	常滑窯。外に施葉。内 面に自然釉付着。
185	R36-02	A	E6	包含層	鉄製品	錠	内径6.1 外径6.7 厚約0.35	-	-	-	-	-	一體欠損
186	R36-01	A	C15	包含層	鉄製品	釘	内径4.0 外径4.6 厚約0.4	内径4.0 外径4.6 厚約0.4	-	-	-	完形	先端つぶれる

【凡】

・遺物番号：本報告書における出土遺物掲載番号を示す。

・実測番号：実測段階の登録番号を示す。

・地 区：小地区は、A区本調査時に使用した4 m グリッドを示す。B・C区は工事立会調査のため小地区は設定していない。

・出土遺構：本報告書の遺構番号を示す。ただし、遺物には調査時の遺構名を注記している。

・色 調：『新版標準土色図』による。複数の色調が存在する場合は併記した。

・備 考：遺物の特徴となる事項を記した。

V 自然科学分析

1 分析の目的

飛鳥時代後期に造営された S D 101 石組遺構は、禊・祓などの儀礼を行う場であったと推測される。ただし、同時代に營まれた宮都の石組遺構は苑池と考えられるものが主流であり、奈良時代になると平城宮東院庭園に代表される「觀賞用」の石組が認められる。

したがって、相可出張石組遺構がどのような性格であったかを知る一助として、古植生に関する情報を得るために花粉分析を実施した。

試料は、飛鳥時代の地表面 A・B のほか、大溝断面より E→L (第11図)、テラス断割りより D (平面図: 第19図) をサンプリングし、花粉分析を行った。また、西岸テラス石貼斜面から出土した炭化材(試料 C: 第17図)を対象とし、用材選択に関する情報を得ることを目的として炭化材同定を実施した。

(相場)

2 分析結果

1. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、簡別、重液 (臭化亜鉛、比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液) 处理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉 (1972)、中村 (1980) 等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

(2) 炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の割断面を作製

し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表 2 に示す。いずれも花粉化石の産出状況が悪く、定量解析を行えるだけの個体数を得ることができなかつた。また、わずかに検出される花粉化石の保存状態も悪く、花粉外膜が破損あるいは溶解の影響を受けているものが多く認められた。

少ないながらも検出される種類は、木本花粉がマツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、エノキ属-ムクノキ属が、蘇本花粉が、イネ科、カヤツリグサ科、ゾバ属、アブラナ科、ネナシカズラ属、ヨモギ属、キク亜科、タンボボ亜科である。

(2) 炭化材同定

炭化材は、軸方向組織が湾曲して複雑に入り組んでおり、木口・柾目・板目が出せない。組織の状況から節部分と判断される。道管が認められること、放射組織に 2 列以上の組織が認められること等から広葉樹であるが、組織配列が観察できないため、種類は不明である。

4. 考察

今回の分析の結果、花粉化石はほとんど検出されず、各層準における古植生推定のための定量解析を行うことができなかつた。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている (中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998 など)。珪藻分析等を実施していないため、詳細な堆積環境は不明であるが、わずかに認められる花粉・シダ類胞子を見ると、比較的の分解に強い種類や、分解が進んでも同定可能な種類が検出されている。花粉が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失すると

されている。検出される花粉化石の保存状態も考慮すると、堆積時に取り込まれた花粉やシダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失し、分解に強い花粉が選択的に残されたと考えられる。

なお、検出される花粉を見ると、草本類に由来する花粉の種類数・個体数が多い。確認されたイネ科、ヨモギ属、キク亞科、タンボが亜科などをはじめとする草本類は、いずれも開けた明るい場所に生育する種を多く含む分類群であることから、大溝周辺などの草地に生育していた可能性がある。また、栽培植物のソバ属に由来する花粉も検出されたことから、9世紀頃の本遺跡周辺での栽培利用の可能性が想定される。

また、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、エノキ属ムクノキ属等の木本類が、遺跡周辺の森林を構成していた可能性がある。

一方、大溝(SD 101)の西岸テラス・石貼斜面から出土した炭化材1点(試料C)は、広葉樹の節であるが、組織配列が観察できないため、種類の特定には至らなかった。そのため、7世紀後半の遺跡周辺に広葉樹が生育し、その木材を利用したことが推

定されるが、祭祀など具体的にどのようなことに用いられたかについては、明言できない。ただし、炭化していることから火を受けていることが窺え、燃料などとして利用された可能性が想定される。今後、さらに情報を蓄積して、検討することが望まれる。

(パリノ・サーヴェイ株式会社 斎藤崇人・本村浩之・高橋 敦)

〔引用文献〕

- 三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壤に堆積した花粉・孢子の保存状態, 植生史研究, 6, 15-30.
 中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.
 中村 純, 1980, 日本産花粉の標準 I II (国版), 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
 島倉巳郎, 1973, 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・孢子・化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

第8表. 花粉分析結果

種類	飛鳥時代 地表面		地山 断ち割り D	大溝(SD101) 南壁断面							
	A	B		E	F	G	H	I	J	K	L
木本花粉											
マツ属	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-
スギ属	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-
エノキ属ムクノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉											
イネ科	-	1	1	2	-	1	1	-	6	2	5
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ソバ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アブガラ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ネナシカラヅラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	2	-	2	1	1
キク亞科	1	-	-	-	-	-	1	-	1	2	2
タンポポ亜科	1	-	-	-	-	-	-	-	5	3	6
不明花粉											
ヒカゲノカラヅラ属	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-
イノモトウク属	-	-	1	2	7	-	8	3	-	1	-
他のシダ類胞子	-	2	5	41	34	8	45	60	3	7	13
合計											
木本花粉	1	2	0	1	1	0	2	1	0	0	0
草本花粉	2	1	1	2	0	2	5	0	15	8	15
不明花粉	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1
シダ類胞子	0	2	7	44	41	8	53	64	3	8	13
総計(不明を除く)	3	5	8	47	42	10	60	65	18	16	28

VI 結 語

1 相可出張遺跡の変遷

弥生時代前期 遺構に伴わないものの、一定量の「亜流遠賀川式土器」が出土した。残存状況も良いことから、比較的調査区に近い位置に、弥生時代前期新段階に営まれた集落があったと考えられる。櫛田川中流域に大規模な集落は認められないものの、下流域では明和町金剛坂遺跡や同町コドノA・コドノB遺跡など、良好な資料を有する集落遺跡が多く展開している。稲作伝来からしばらく経った時期に、中流域にも人々が定着していたことがいえよう。

古代 飛鳥時代後期、大溝SD 101が造営される。大溝の底に石組の施設が造営され、わずかな期間使用されたのち、上流から流れ込んだ砂礫により石組が覆われる。同時期、掘立柱建物SB 10が建てられる。SD 101はそのまま流路として機能し、奈良時代前半から平安時代末期にかけて緩やかに埋没していったと思われる。

中世 鎌倉時代後半から室町時代初頭になると、A区南側に土坑や溝などが確認される。街道に面しているB区でみつかった、根石を伴う柱穴は、建物跡と考えられる。SD 102・SD 103はいずれも櫛田川にそぐ溝で、性格は排水路もしくは屋敷に伴う区画溝と考えられる。

3基ある中世墓は、いずれも屋敷の北側（櫛田川側）に位置しており、屋敷墓と考えられる。周辺は大規模な擾乱を受けているため、おそらく本来は3基以上造営されたものと考えられる。SK 107の土師器鍋は、外一内方向の焼成後穿孔が認められ、外部外面に煤が付着していることから、穿孔は埋葬時に行ったことがわかる。鍋は、被葬者の頭上にあたる位置に2個体が下向きに重なって置かれており、これは何かを封じ込める意味で置いたのであろうか。いわゆる中世墓と呼ばれるもののなかで、副葬品に日常雑器である鍋を入れる事例は少なく、逆さまに置く事例は更に珍しいといえよう。また、当該期は火葬が主流であるが、在地的な意味合いの強い土葬を選択していることも特筆すべき点である。

そして、第1次調査で花文山茶碗や貿易陶磁、腰

刀などが出土していることは、周辺に一定程度の有力者の屋敷があつたことがうかがえる。

相可高校の南側には、奈良から伊勢に通じる道のひとつである「伊勢本街道」が通っているが、相可出張遺跡は、相可地区で中世集落が見つかったはじめての事例であり、今後、当地域の集落展開を考える上で重要となろう。

2 石組遺構の考古学的位置づけ

時期 SD 101の造営年代は都城編年¹¹の飛鳥IV期に併行し、西暦700年代後半、天武・持統朝にあたる。須恵器編年¹²ではTK 46型式併行期、斎宮編年¹³ではI-1段階に比定される。

構造 まず古墳時代から飛鳥時代における石組遺構の事例を挙げ、つぎに当遺跡の特徴をのべる。

古墳に伴う石室や葺石、列石を除くと、同時代の石組遺構は宮都のあつた飛鳥地域に限定される。代表例は奈良県島庄遺跡の庭園遺構¹⁴、飛鳥京跡苑池遺構¹⁵などである。それらの特徴は朝鮮半島から来たデザインを元とし、①（方形など）幾何学的平面形の苑池 ②園池の石積み護岸 ③装飾物として精巧な加工が施された石像物があることとされる。¹⁶

飛鳥地域以外では唯一の事例である宮城県仙台市郡山遺跡の石組池SX 1235は、官衙遺構に伴うもので、奈良県明日香村石神遺跡を意識した方形池である。給排水および浄水を貯める施設をもち、その性格は「夷狄が服属儀礼を行なう前に心身を清める禊を行なった場所」と想定されている。¹⁷

一方、相可出張遺跡の石組遺構は全体に曲線的で自然石を用いたものであり、飛鳥地域の先進的で人工的なデザインとはまったく異なっている。相可出張遺跡の特徴は、①池ではなく、溝の護岸を基本としている ②湧水点があり、その上に石敷と石積のステージを設けている ③中心的な施設と考えられる西岸に2段のテラスがある ④貼石を伴う“流れ”が櫛田川にそぐことなどが挙げられる。

つぎに、各要素を解体する。まず石積について、島庄遺跡庭園遺構や飛鳥京跡苑池などで護岸として用いられたものと対比すると、当遺跡の石積はしつ

かりと地盤に支えられておらず、止水としての機能は低い。むしろ隣接する湧水点・石敷を守る壁として一定期間安定させるためだけに造られたとみられる。

また、“流れ”については、飛鳥地域の石積護岸・底石敷き構が朝鮮半島からもたらされたと推測されるデザインであるのに対し、当遺跡の事例は非常に曲線的である。³⁰したがって、類例は古墳時代以前の日本在来の系譜に求められよう。代表例として挙げられる伊賀市城之越遺跡³¹では、4世紀半ばに造営された湧水点からの“流れ”が重要な構成要素となっている。飛鳥地域で大陸風デザインの石組が造られていた飛鳥時代後期に、伊勢の櫛田川中流域では、古墳時代の伝統的手法を用いた石組が造営されたいたことがうかがわれる。

3 石組遺構の性格

水辺の祭祀と苑池 さて、飛鳥時代の庭園は、建物を伴うことを大きな特徴としている。相可出張遺跡を概観すると、SD 101 東岸から S B 10 を検出しているが、大型の建物ではなく、石組に直接伴うものかどうかは不明である。当時の景観復元を行うため花粉分析を行ったが、奈良県平城京東院庭園³²で検出された觀賞用植物とみられる花粉は検出されなかつた。したがって相可出張遺跡の場合は、飛鳥時代や奈良時代の宮都にみられる「見る」苑池、つまり觀賞用や宴遊の場ではなく、祭祀などを「行う」場であつた可能性が高い。

石組を伴う遺構で祭祀を行ったことが想定される遺跡として、三重県城之越遺跡や奈良県南紀寺遺跡³³などがある。当遺跡においても湧水点の上に石積・石敷のステージを設けていることから、諸儀礼を執行する「場」であったと考えられる。機能として祭祀などが想定される古墳時代以来の石組遺構と、飛鳥時代以降の庭園とのつながりについては不分明な点が多いが、当地で飛鳥時代の石組遺構がみつかつたことは、今後当期の庭園遺構を検討する上でひとつの材料と成り得るものと思う。

出土遺物 テラス石貼の一帯に炭化材が残存しているものの、祭祀遺物は認められないことが大きな特徴である。石組裏込めおよび最下層からは、日常的な器種である土師器杯・甕が出土している。ただし、飛鳥時代後期の出土遺物がわずかであるなかで、須

恵器壺蓋2点（第23図-31、第2図-104）が、いざれも古墳や都などで意識的に用いられる宝珠つまみをもつタイプであることは特筆されよう。

出土遺物の傾向をみると、三重県内の城之越遺跡や六大A遺跡³⁴では、古墳時代における祭祀の特徴ともいえる祭祀遺物の大量投棄がみられるが、当遺跡はまったくその痕跡がみられない。石組の形態は古墳時代の系譜上に位置するものの、具体的な機能や目的に差があつたことも考えられる。

性格 石組のステージを設け、湧水点からの水を櫛田川に流すこと、祭祀遺物が無いことから、性格は、禊・水垢離・祓などが想定されよう。禊とは、「水灌ぎ」と「身削ぐ」の2つの語源があり、多くの場合が、川に臨んで行う儀礼で、穢れを落とし、聖性を身につける儀式と認識されているようである。³⁵行為の内容としては、京都市葵祭の斎王代の禊のように、からだの一部を洗うもの、もしくは周りから水をかけられるものなどが想定される。使用者が湧水点のある石敷の上に座り、“流れ”に向かって潔斎する姿などが想定されよう。西岸に2段のテラス状施設があることも、こういった行為と何らかの関係があるかもしれない。

造営者像 以上のことから、大漢の造営者像および利用者を考える。まず造営主体であるが、これは櫛田川中流域の在地勢力である可能性が高い。石組遺構の構造が、都のものとはまったく異なり、むしろ古墳の葺石や城之越遺跡の貼石など古墳時代以来の系譜に属するところである。

使用者像 では、実際に禊を行った主体は誰であったのであろうか。第一の可能性として、地域の有力者が造営し、自身で利用したことが挙げられる。当該地は、前方後円墳こそ認められないものの、6世紀後半の石塚谷古墳や大日山古墳から豊富な副葬品が出土しており、古墳時代後期以降の重要な地域である。周辺の水田開発を進めるにあたり、櫛田川にそぞろ位置にあたる相可出張遺跡周辺に、水に関わる儀礼空間を造営したのであろうか。この場合、SD 101の前身が自然流路であったとしても、7世紀代の土木工事としてはかなり大規模なものであったといえよう。ただし、この時期の在地首長による石組を伴う祭祀遺構の造営は類例がなく、広大な地域開発事業の一環としての儀礼を想定した場合、櫛田川

に沿って同様の遺構が複数存在することを想定する必要があろう。また、農業用水に関わる祭祀は水の配分が重要となるため、丘陵に近い上流部で行われることが多く、川に近い当地はやや不適切といえる。

次に、地域の有力者が造営し、他地域の人間が利用した可能性について考えてみよう。飛鳥時代後期の櫛田川流域をより広域な視点でみると、下流域に所在する斎宮がまず目にとまる。7世紀後半、伊勢神宮に仕える斎王の居所である斎宮が成立したと考えられるが、禊や祓などは斎王と関わりの深い儀礼であり、斎宮成立と前後する時期に相可出張遺跡の石組が造営されることは注目される。ただし、斎王による禊などを想定した場合、斎宮からは直線距離で約8km離れた上流部にあたり、当時の群行ルートとして当地が適当かどうかが問題となる。

このほか、近傍には櫛田川渡河点があったとみられる事から、テラスや「流れ」を境と捉える境界祭祀の可能性がある。神三郡の条里型地割りをみると、相可郷は飯野郡・多気郡の郡境にあたる⁴⁰。また、伊勢神宮の神都成立過程を記した『皇太神宮儀式帳』によると、多気郡内でも竹田・有爾中・佐奈（相可）という複数の支社單位のまとまりが認識されていた可能性が指摘されている⁴¹。さらに、遺跡の西側に位置する三足田・四足田の地名が、日祀部に関わる「日置」に由来し、在地氏族と神宮祭祀との関連から、大和の宇陀と櫛田川を結ぶ当地を重要視する意見もある⁴²。このように相可は、国と国、伊勢と大和を結ぶ交通線上に位置しており、渡河に伴う儀礼の場として申し分ない。

いずれにせよ、使用者像や機能は推論の域を出ないものの、祭祀行為が櫛田川と密接に関わっていたことは立地からみて明らかであろう。

4 統括

石組についての考察で始終したが、飛鳥時代後期以降の相可出張遺跡を考えるにあたり、南側に広がる多気郡条里との関わりも重要である。SD 101の造営は飛鳥時代後半であるため条里制の施行には先行するが、平安時代後期に埋没するまでは上流の排水路として利用された可能性が高い。条里型地割りがN 9° Wであるのに対し、SD 101はN 16° Eであることから、条里溝そのものとは言い難いもの

の、排水路として活用されたことは容易に想像できる。また、これはSD 102・SD 103も同様である。

相可出張遺跡の評価をめぐっては、石組遺構の造営者・使用者など、問題が山積しているといえる。相可は伊勢神宮との関わりが深い、後の神三郡域に位置し、大和から伊勢へのルートとして用いられた伊勢本街道に面している。櫛田川中流域および佐奈川流域には古墳群や須恵器窯、丹生水銀生産地など重要な遺跡が多く、磯部氏や神宮とのつながりが認められる式内社、古代寺院も点在する。今後、櫛田川流域の地域史のなかで、石組遺構をどのように位置付けていくかが課題となろう。

（相場）

〔 註 〕

- (1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976、奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原京発掘調査報告Ⅱ』1978、奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告XVI』2005
- (2) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- (3) 『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区的調査本文編』斎宮歴史博物館 2001
- (4) 横原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報 1999年度第2分冊』2000ほか
- (5) 奈良文化財研究所『飛鳥池跡発掘調査報告Ⅰ』2004
- (6) 小野健吉『岩波 日本書紀辞典』岩波書店 2004、小野健吉『発掘庭園に見る日本庭園の成立』考古学ジャーナル 59号 ニューライエンス社 2010
- (7) 仙台市教育委員会『郡山遺跡発掘調査報告書』2005
- (8) 相可出張遺跡の「流れ」は、小石を敷き詰める洲浜状を呈していると指摘されるが、調査区内のベースは小石が混じっていることから精査は厳しく、ここでは可能性を指摘するにとどめる。洲浜は奈良時代初期段階には確立しており、人工の丘と石敷の水辺を有する古墳と、後代の苑池を結びつけることが注目されるが、初現・定着には不明な点も多い。
- (9) 三重県埋蔵文化財センター『越之越遺跡』1992。このほか、梶谷裕昌氏からは多大な助言を頂いた。
- (10) 奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告 XV 東院庭園地区的調査』2003
- (11) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』1995
- (12) 三重県埋蔵文化財センター『一般国道 23号中勢道路(8工区)建設事業に伴う 六大A遺跡発掘調査報告』2002
- (13) 斎宮歴史博物館『寶茂齋院と伊勢神宮』2010
- (14) 斎宮歴史博物館『斎王のおひまと』2006
- (15) 横村寛之『古代伊勢国における詳・郡・県と「国」についての覚書』『斎宮歴史博物館 研究紀要』17 斎宮歴史博物館 2008。横村寛之氏からは多くの助言を頂いた。
- (16) 和田翠『兄国と弟国』『日本古代の儀礼・祭祀 下』瑞雲房 1995

〔 参考文献 〕

- ・奈良文化財研究所 2006『古代庭園研究 I-古墳時代以前-奈良時代-』

図版



2006 三重県共有デジタル地図（写真地図データ2500）三重県自治会館組合
遺跡周辺の航空写真

写真図版 1

調査前風景・A区全景（東側）・SD



調査前風景（北西から）



A区全景（東側）（西から）



SD 101・SD 102・SD 103（北東から）

A区全景
(西側) · SD 101 土層断面



A区全景 (西側) (北西から)



SD 101 土層断面 (東から)

写真図版 3

S
D
101
石組遺構
(1)



石組遺構検出時（北から）



石組遺構検出時（北から）



SD 101 石組遺構（東から）



西岸テラス（北から）

写真図版 5

S
D
101
石組遺構(3)
•
S
K
107



石積・石敷 (西から)



西岸テラス土層断面 (北から)



石組遺構検出時 (北から)



石敷 (北西から)



S K 107 (西から)



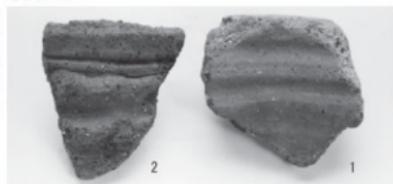
SK 107・SK 112 (南東から)



SK 107・SK 112・SK 115 (南から)

写真図版 7

出土遺物(1)





写真図版 9

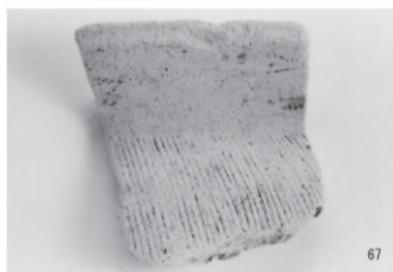
出土遺物
(3)



64



55



67



65



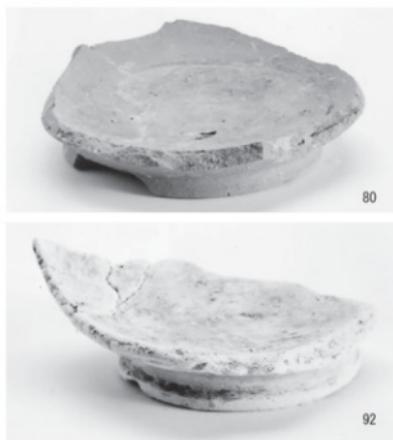
70



68

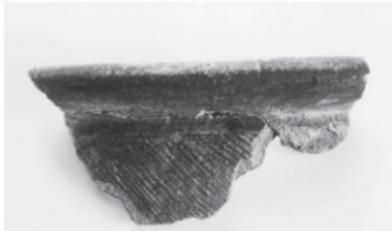


90



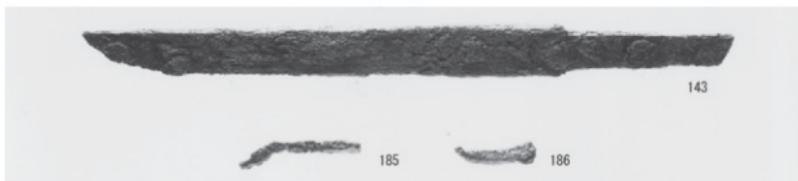
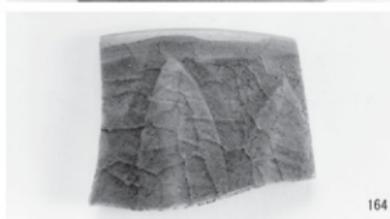
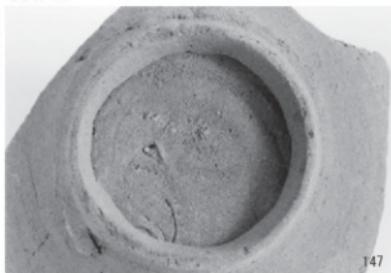
80

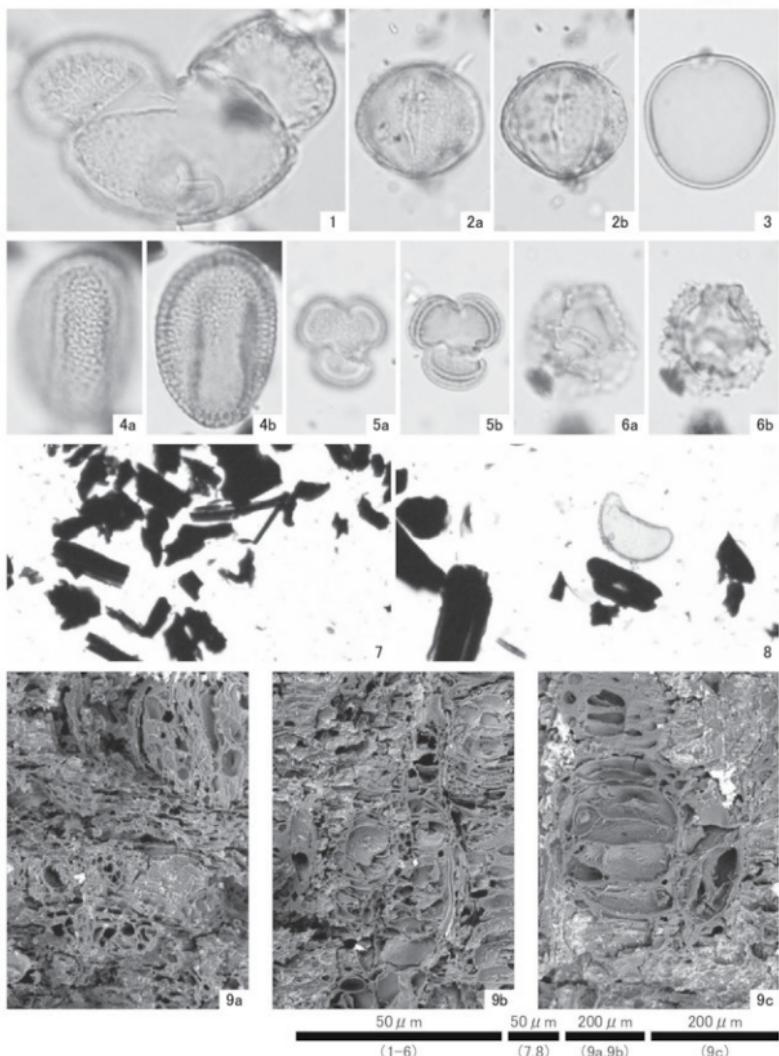
92



写真図版 11

出土
遺物
(5)





1. マツ属(黄灰色ベース:B)
3. イネ科(SD101:L)
5. ヨモギ属(SD101:H)
7. プレバラート内の状況(黒ボケ:A)
9. 広葉樹(SD101:C)

2. コナラ属コナラ亜属(SD101:H)
4. ソバ属(SD101:G)
6. タンボボ亜科(SD101:K)
8. プレバラート内の状況(SD101:F)

報告書抄録

ふりがな	おうかでぱりいせき（だい2じ）はっくつちょうさほうこく						
書名	相可出張遺跡（第2次）発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	330						
編著者名	相場さやか・森川常厚						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732						
発行年月日	2012年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
おうかでぱり いせき 相可出張遺跡	みえけんたきぐん たきょうおうか 三重県多気郡 多気町相可50	441 a428	34° 50' 22"	136° 53' 90"	2010.04.30 ～ 2011.01.27	1,288	平成22年度 新校舎 建築事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
相可出張遺跡 (第2次)	祭祀跡 集落跡	弥生 古墳 古代 中世	なし 土坑 大溝、石組遺構 中世墓、溝、土坑	弥生土器 土師器、須恵器 土師器、須恵器 土師器、山茶碗、陶器、青磁	大溝から、飛鳥時代後期の祭祀跡と考えられる石組遺構がみつかった。		
要約	楠田川中流域の南岸に位置する。平安時代末期に埋没した大溝の最下層から、飛鳥時代後期に造営された石組遺構が確認された。涌水点を有する石組遺構は、鹿などの祭祀を行った場であったと考えられる。大溝埋土の自然科学分析結果を掲載した。 鎌倉時代後期から室町時代初頭の中世墓を3基検出した。周辺からは溝や土坑、屋敷に伴う柱穴群がみつかった。						

三重県埋蔵文化財調査報告330

相可出張遺跡（第2次）発掘調査報告

2012（平成24）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 ㈲ミフジ印刷